
モンスターハンター～果てし無き旅～

蘭土

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター〜果てし無き旅〜

【Nコード】

N4573K

【作者名】

蘭土

【あらすじ】

ハンターが広大な自然を駆け、巨大なモンスターとの狩りによって弱肉強食のサイクルが成り立つこの世界。しかしその裏には、武具を身に纏ってハンターを装い、人間を殺す者達もいた。

そんな世界の傍ら、ロックラックシティに住む16歳の少年・カイは、ひよんな事でハンターになってしまふ。自ら望んでその道を歩み出すも、ジョーと名乗る不思議な男によって彼の運命は狂い始めた……。作者の都合により、長らくの間は更新がありません。ご了承ください。

全ての始まり

ロックラックシティ。広大な砂漠の中にあつた水源を中心にして栄えてきた巨大都市。今では砂漠の中ではこれ異常ないほどの豊かさを兼ね備えた場所だ。交通の便でも多くの人々に役立っているため、多くのハンターが自らの職業である『狩り』を行うためにここを訪れる。

もつとも、自分には関係の無い話だが…。

カイは人通りの多い大通りを歩いていた。両側には多種多様な店舗が立ち並び、様々な品物が並べられ、様々な匂いや掛け声が漂っている。

彼はとある小さな鍛冶屋の、十五歳の一人息子だ。母親は彼が物心付く前にこの街を出て行き、酒に溺れる父親と二人暮らしをしている。

カイは大通りを抜け出し、清水が流れる川の淵に腰掛けた。する事も無くしばらくぼんやりと、近くの、川を跨ぐ橋の上を行きかう人々を観察した。向こう側からハンターが見えて来た。黒い棘の赤い防具に身を包み、背丈をも越える巨大な剣を背中に背負っている。そのような雄々しい姿を何度見、そして憧れてきただろうか。

カイの夢はハンターである。小さい頃から、街で見かけるハンターたちに憧れを抱いていた。今でもそれは変わらない。

「カイ、おつはよ」

背後から揚々とした声がした。後ろを振り向くと幼馴染のヨウが立っている。

「またハンターの見物か？好きなんだな、ほんとに」

「いいよなあ、俺もいつかあんな風になりたいよ」

カイは先ほどの赤い防具のハンターをうっとり見つめた。彼だけは数多いハンターの中で最も目だって見える。というのも、あの防具を付けるハンター自体大して見かけることが少ないのだ。まして

や全身を同じモンスター——火竜・リオレウスから取れる素材から作っているのはそういない。中々の腕を持っているようだ。

「その気持ちは分かるけど、お前の店は誰が継ぐんだよ」

ヨウが隣に腰掛けながら呟くように言った。

「あんな親父なんかどうでもいいよ」

「ハンターなんて命がけの仕事だぞ。俺もあんな風にはなりたいたいけどさ、死んだら全部終わりだぞ」

確かにハンターという職業が命懸けであることは知っている。今まで狩りに行ったきり帰ってこなかったという者だって少なくはない。

「本物のモンスターとやり合うときって、どんな感じなのかな」

「俺は見たことあるよ。体中に泥をつけた、デカイ奴。あれは尋常じゃなかった」

「それ何回も聞いたよ……」

しばしの沈黙。

「ジエン・モーランって知ってる？」

「たぶん」

ジエン・モーランとはこの砂漠地方に生息する、とてつもなく巨大な生物だということは知っていた。しかし現れるのはかなり稀らしく、最後の記録は二十年も前らしい。

「最近、そいつの目撃情報が増えてるらしいよ」

「へえーっ、何でそんな事知ってるんだよ」

「来なよ」

ヨウはすくりと立ち上がると橋を渡りだした。カイも後に続く。途中、橋の上で立ち止まっている赤い防具のハンターとすれ違った。ちらりと頭の防具の隙間を覗くと、鋭い眼光が睨んできた。

「あんまり人の顔をじろじろ見るなって」

ヨウが前方から小声で注意した。

しばらく歩くと酒場に着いた。この中にいるのは厳つい大人ばか

りなので、今までほとんどはいった事は無い。しかしヨウが平気で入って行くのであわてて追いかけた。

「ほら、あそこを読んでみなよ」

ヨウは広い酒場の壁一面に設置された、巨大な提示版を指差した。その周りでは様々な姿をしたハンター達がガヤガヤと騒いでいる。

提示版には様々なポスターや、クエストと言われる依頼などが所狭しと張られていたが、非情な事に、一枚の巨大な貼り紙がその上から貼られている。左右も同じく、どこまでも隙間無しに貼られていた。

『観測隊の調査により、ロックラック近辺に、ジエン・モーランが確認されました。』

ここへの到達は、一ヶ月後と推定されております。一般市民は早めに避難し、ジエン・モーランの撃退、又は討伐を志願する方は、下の欄に署名をお願いします。

ハンターズ

ギルド本部』

「一ヶ月も後なのにか…」

「なんせこの街が襲われたらひとたまりも無いから…」

「そうか……」

「だよな…っておい、何してるんだ、やめろ！」

カイは何のためらいも無く、自分とヨウの名前を羽ペンで署名していたのだ。

「俺達、何も登録してないんだぞ。無駄に決まってる」

「そんなのどこに書いてる？」

確かにカイの言う通りだった。普通なら年齢やランクなどの制限が必ず書かれてあるのだが、緊急のためか、そんなものは見当たらない。

「勝手にしなよ、無駄に決まってる」

もちろん、二人とも本当に行けるなんて思ってたなどいなかった。

次の日、カイは父親にたたき起こされた。

「家の手伝いもしないで、いつまで寝てんだてめえは！」

部屋の中に罵声が響く。カイは布団を無理やりはがされた。

「酒くせーんだよ、第一、客もろくに来ねーのに」

「うつせえ、とつと起きろ」

父は大きな音を立てて部屋から出た。

この言い合いは毎日の日課のようになっている。カイはまだ眠たかったが、これ以上寝ると父がうるさいのでしぶしぶベットから降り、着替え始めた。あの親父がカイに優しくしたことなど、カイの記憶には一かけらもない。いつも思い浮かぶのは、酒で顔を赤くしてがなり立てている姿だ。

窓からは濁った光が部屋を照らし、ホコリを浮かび上がらせている。

突然、窓をがしやがしやと叩く音がした。

———
こんな朝から誰がこないたずらをしているんだ。

窓を勢いよく開け、罵声を上げようと口を開いたが、すぐに言葉を飲み込んだ。窓の外にいたのはヨウだったのだ。

「あの……、ちよつといい？」

「なんだよ」

「ポストの中身見て」

着替え終わったカイは部屋を出て、蒸し暑い鍛冶場を素通りし、大通りへ出た。

すぐそこでは先に木製のポストを開けたヨウが立っている。

「大変なことになったぞ……」

出したらしい封筒をカイに差し出した。封筒にはこう書いてある。

『ハンターズギルド本部より

レイル・カイ様へ』

嫌な予感がした。確か昨日、おもしろ半分で、あの緊急のポスタ
ーに署名をして……。

カイは封筒の中身を恐る恐る引き抜き、二つ折りの紙を開くと、
内容を黙読した。

『勇気ある志願をしていただき、誠にありがとうございます。当
本部では、緊急によりまして、共に署名したドリスタ・ヨウ様も登
録をさせていただきました。
もしものがあつた場合、葬費はこちらが賄いますのでご安心下
さい。』

詳しいことは、中央広場でご説明させていただきます。』

「葬費だと………」

その言葉に、カイは啞然とした。

なんとということだ。おもしろ半分でやったことなのに……本当にハ
ンターになつてしまった。

いや、待てよ、俺は今までハンターを夢見てきたじゃないか。なぜ
がっかりするんだ？こんな簡単に夢が手に入ったんだ。

…… やつた…… やつた！

「やつたぞ、俺達はハンターになれたんだ、夢が叶つた！」

カイは思わずヨウに抱きつく。しかしその思いは、絶望を紛らし
ているだけだということは自分でも感じていた。

「そんな………」

ヨウはかなりの放心状態になつてしまったようだ。

「ハンター？」

突然後ろから親父の低い声がした。

「それをよこせ」

カイが何も言わぬうちに手紙を取り上げると、無言で読み始めた。

……気まずい空気が流れる。

「お前、何をした」

親父の顔は怒りで真っ赤に震えている。

「別に、俺はこんなつもり無かったし」

カイの隣ではヨウが縮こまっている。

「仮にお前がどこかに行くとしたらここはどうするつもりなんだ。

ああ？」

「関係ねえだろ。こんなボロ屋、無くなっちまえばいいよ」

「それって言いすぎだろ」隣のヨウがささやいた。

「俺は、行く」

「無駄だ」

「行くんだ」

「何のためだ、夢だからか？」

「もうここには居たくないんだ」

「はっ？」

「お前の顔が見たく無いんだよ」

「自分の親に向かってなんだそれは！」

カイは父親の顔を一瞥し、その場を早足で離れた。後ろからヨウも追いかけてくる。

「なあ、あんな事言っというて大丈夫なのか？」

「よくある事だよ。でももしかすると、本当に家に帰れなくなるかもしれないけどな」

隣でヨウが息を呑んだ。

「俺、親にこのこと話したらさ、『そうか、お前もそんな歳になったのか』って言われて……。俺の父さん、元ハンターだから、あっさり賛成されたよ」

大通りではなにやら荷造りをしている人が多い。まさか、ジエン・モランというモンスターが来るに当たって一ヶ月も前から非難を始めているのか。

「カイ、さっきの手紙、ちゃんと読んでた？」

「細かい所は読めなかったなあ」

カイは父親の憎たらしい顔を思い出した。

「かなり条件付きでさ、どうやらギルドは俺たちが子供って気付いて無いんだよ」

「そうだな。名前だけだったし」

「もう勝手に登録されてるけど、子供だと知られたら見逃してもらえないんじゃないかな」

「子ども扱いつてのはなあ」

「とりあえずそれは広場に行けば分かる話だよ」

十字路を右折すると、もうそこに広い円形の中央に噴水がある広場が見える。

その周りには志願したらしきハンターたちがまばらに立っていた。

その中に、昨日見た赤い防具のハンターも混じっている。

カイは目を合わさないようにしてそこを通り過ぎると、その防具の中から密かな笑いが聞こえた様な気がした。

気になって後ろを振り向くと、少しも動かずに、巨大な剣を背負った真つ赤な背中が見える。

……気のせいかな。

覚醒（前書き）

この題名、どこかで見たことあるだつて？
気にしない気にしない。

覚醒

俺は狭苦しい甲冑の中からしか外が見られない。なぜかって？

それは雑魚どもを倒すためじゃない。本当の俺を隠すため。

俺はすることも無く、ただ外の世界を眺め続けた。そこに見覚えのある奴が映った。

そうだ、そいつは昨日、俺の中をじろじろと見てきやがった奴。俺だけの世界を汚しやがった奴。

あいつを潰さなければ。

すれ違う時、俺はふと笑い声を漏らしてしまった。

なぜなら俺は見たのだ。

そいつの懷に俺と同じ紙を持っているのを。

装備も何も持たずに？

あんな餓鬼が？

面白いじゃないか・・・

アイツは俺の「獲物」だ・・・

覚醒（後書き）

赤い防具のハンターがカイを倒さなければならぬ理由とは！？
いや、興味ない人は深く考えなくてもいいんだよ。

決断（前書き）

春休みが来たぞ！
バンバン投稿していこう！

決断

しばらくぶらぶらして、何をしようか途方にくれていると、どこからか白髭を生やしたいかめしい老人がやってきた。両手を後ろに添えており、猫背だ。

視線を受けながら噴水の前に立ち、大きな咳払いをすると、周りのハンター達はいつせいに静まり返った。辺りには噴水のせせらぎと、乾いた風の風の音だけが響く。その緊張感溢れる雰囲気、二人もとりあえず辺りに従った。

「誰？」

「さあ……」

とりあえず、この老人が有名であることが周りの反応で分かる。

広場はしばらく静まり返り、名も知らない老人は威厳のある、よく通る声で話し始めた。

「ここに来ておるといふ事は、ハンター最大の試練を志しておるのだな」

——最大の試練？

「知つての通り、このロッキラックは、危機を迎えようとしておる。しかしこれは初めてではない。これまで、いくつもの勇敢なハンター達の魂がこの街を守ってきた。次の英雄は、この中にいる」

——全員じゃないのか？

「……ちなみにお前達は？」

老人の目がこちらに向いた。周りの武具を身に着けたハンター達も、ちらちらと二人を見ていた。

やはり降ろされるのだろうか。出来ればそうであればいいと内心では思う。

「まさか、ギルドから通告を？」

「いや、その、つもりは無かったんですけど……」

カイは懷から例の手紙を出してみせると、老人はあきれた顔をし

た。

「全く、ギルドも最近は規制がたるんできておる。いいか、ハンターは未成年にはできん。これは決まりなのだよ」

老人が手紙を取り上げようとした、その時、

「いいじゃないですか、僕が面倒を見ましょう」

どこからか若い男の声がした。辺りを見回すと、人混みを押し分けて一人のハンターが現れた。赤い防具の、あのハンターである。

向かい合った三人の周りから視線が集まる。

「僕が彼らの面倒を見てあげますよ。いいじゃないですか、危険な事はありません」

「しかし、保護者の同意がいる」

「いいじゃないですか、これはギルドのミスです。この二人は何も悪くありませんよ」

老人はしばらく眉を寄せていたが、遂に決断を下した。

「……いいだろう」

周りのハンター達はザワザワと動揺の声を漏らした。

「しかし、当たり前のことだがジエン・モーランと戦わすわけにはいかない。奴に殺された人間も大勢いる」

老人は遠くを見る目をした。

「二人には採用試験を受けてもらおう。全てのハンターが必ず最初に通る道じゃ。しかし、別に受けるかどうかはお前達が決める。さあ、どうする？」

カイは考えた。

今まで夢見てきたハンターに、こんな形になってしまった。

これでいいのか？

脳裏に父親の顔が浮かぶ。別に死んでも悲しむわけは無いだろう。それに、ハンターは儲かる仕事である。それでも何かが脳裏に引っかかる。モンスターの餌食になる直前、今の事を後悔してしまわないだろうか。

この決断で、自分の人生は大きく変わるだろう。

カイは決断を下した。

「……行きます」

カイは小さな声で言った。

「そうか、お前はとうする？」

老人はヨウに向き直った。

「ヨウ、別に行かなくてもいいんだ。気にするな」

「そうするよ」

あまりにあっけない答えに、カイは戸惑った。

「俺、カイみたいに強くは無いからさ、もっと強くなったら、追いつくよ」

「そうか、約束だからな」

二人は硬く手を取り合った。ハンター達の中からはすすり泣く声が聞こえる。

「二人の決断は決まったか。しかし、武器はどうする気だ？」

「家に腐るほどあるので」

防具は分らないが。

「うむ、ところでさっきの男は」

「えっ」

いつの間にか赤い防具のハンターは消えていた。周りのハンターもきよろきよろと周りを見渡すが、どこにもいないらしい。

「全く……、最近は何にやら物騒なことが多いわい。指名手配中の大量殺人鬼がここに来ていてるなんて噂まで流れているからのう」

「ええっ、マジ！？」

ヨウが驚きの声を上げた。

「なに、ただの噂じゃよ。本当ならとつくに通告が来てるに決まってる」

カイはどこからか、またあの笑い声が聞こえてきたような気がした。

——また気のせいかな……。

カイは恐る恐る、音を立てぬように家の入り口を開けた。父を避けるために遅くまで外で暇を潰してきたために、空は満天の星空である。窓の光が無いという事は今頃大いびきをかいて寝てるに違いない。

ドアをそつと開けて暗い鍛冶場を覗いた。

——さてよ、何か音がする。

一定の間隔を置きながら、何かの刃を研ぐ音が聞こえる。

……その音がふと止まった。

「……帰ってきたのか？」

暗闇の中から低い声がした。

いつもとは違って威厳が無い。いつもなら無視して寝室に向かうが、仕方なく付きやってやることにした。もちろんあの事も関係はある。

「あのさ、ちょっとした話があるんだ」

「ハンターになるんだろ」

「えっ？」

「気になってお前の跡をつけてな。全部見させてもらった」

目が慣れて、父の姿がやっと分かった。手には何やら長い刀身の剣を持っている。

「これは俺が昔使ってた愛剣だな。火竜と雌火竜から取れる貴重な素材から作られている」

「おい、まさか親父……」

「俺も昔はハンターだったさ。お前が生まれるのをきっかけに辞め

たがな」

それは自分のせいと言う事なのか？

「俺の装備を使うといい。古いが、全然使える」

父は立ち上がると、剣を手にも、ゆっくりと歩み寄ってきた。いつもとはあまりに違う態度にカイは後ずさったが、父は強引に押し付けてくる。

「これは『飛竜刀』といって、こいつには様々な力が秘められている。だがお前が知るにはまだ早い」

「強いのか？」

「それは使い方次第だ。人によつてはただの太刀としか使えん」

カイは長い刀身を、恐る恐る手に乗せた。辺りには何の光も無いのに、その刀身は白く輝いていた。

持ち手には赤と緑の分厚い皮が張られ、刃のつけ根から鋭い爪が飛び出している。この素材がどのような怪物からとれたのかは分からない。それでも、白く輝く優美な刀身は、威厳を漂わせていた。

「防具も持つていくといい」

知らないうちに鎧らしき物を手に持っている。カイは今までに無いあまりのサービスに啞然としていた。

「……ホントに俺の親父か？」

決断（後書き）

そろそろバトルシーンが書きたいです。
やっぱ小説は楽しいなあ・・・。

闘技場にて（前書き）

二作品を同時に連載していると疲れます・・・
責任もあるし。

闘技場にて

「やあ、心配になって見届けに来ましたよ」

赤い防具のハンターは、カイの背負っている太刀を上から下まで眺めた。頭にも防具をはめているのであまりよく分らないが。

「立派な太刀ですね。実は僕の装備も全て火竜から取れるもので作つてあるんです。雄だけですかね」

「あの…、この前はどうもありがとうございます」

「いえ、困ったときはお互い様ですから」

カイは思った。この前、橋の上ですれ違った時に鋭い眼光で睨んできたのは確かにこの男の筈だろう。あまりに自分への対し方がおかしい。

だが、そんな事に構っているわけにはいかない。これから自分が受ける試練、そこで自分が終期を迎えてしまわないだろうか。

「……僕が討伐するモンスターと言つのは何ですか」

男のこちらを向いた。ヘルムをはめているので、表情や顔立ちも一切分からない。しかし、考えていることは声色で分かった。

「きつとドスジャギイでしょう。君には危ないでしょうけど、監視がいるから死にはしませんよ」

『ドスジャギイ』。それはカイも見た覚えがある。捕獲されたりしき、鮮やかな紫色の、大人の大きさを一回り超えた巨体があるハンターが荷車に積んでいたのだ。それぐらいのことはよくある。

歩いていくうちに、両脇に立ち並ぶ建物の間から円形の闘技場が見え始めた。かなり古いために風化が進んでいるが、建物自体はしっかりと垂直に立っている。外側を幾本もの巨大な柱で囲まれ、その中に守られるようにして堂々と佇む砂色の外壁。その壁の向こうでは、幾人ものハンター達が武器を手に巨大なモンスターと戦っている。しかし種類によっては遠距離の攻撃ができるモンスターも多いらしく、一般人の観戦は愚か、闘技場に近づくことすらままなら

ないのだ。これから自分はその中で、実際にモンスターと戦わなければならぬ。

心臓の鼓動が大きくなってきた。

「ちなみに防具はいつ付けるつもりで？」

突然耳に入って来た言葉に、はっと我に返る。男のヘルムはカイが腰に括り付けた防具の一式を見据えていた。

「よく分かんないので、向こうに着いたら付けるつもりです」

今朝も父は居たのだが、なぜか気がとがめて話しても無い。

「武器はそんな立派なのに、防具はずいぶん安っぽいですね」

これは皮肉というべきだろうか。

「すいませんね、ちよつと皮肉っぽかったでしょうか」

これも逆にいらつと来た。この男の話し方には、何かを感じる。

心の中でも表現しづらい『何か』が隠れている。考えすぎだろうか。しばらく無言で歩き、二人は闘技場の厳重な門の前に立った。門の両端には護衛が立っている。

砂色の外壁を見上げると、建物の威圧感に押し潰されそうになった。この壁の向こうはこちらとは別の世界。命がけの場なのだ。

「僕は別の場所から観覧しているので、お先にどうぞ」

一般人は無理でも、モンスターの危険さやそれに対する判断を熟知し、前もって許可を得たハンターなら観戦はよしとなるらしい。

その事はヨウから聞いたことがあるので、男に聞く必要も無かった。

「あの」

「はい？」

カイから遠ざかろうとした男は立ち止まり、横目でこちらを見た

……のだと思う。

「名前を伺いたいのですが……」

「そういえば言ってますでしたね」

赤い防具のハンターは一息つくつと、今までにない低い口調で、言った。

「私の名前は、キル・ジョーと申します。変わった名前でしょう」

次には有無を言わず、黙って建物に沿って歩き始めた。何らかの鱗を重ね合わせて作ったらしき黒と赤を基調とした防具の後姿は、その男の経験を物語っていた。

「ちよつと、ここは子供の来る場所じゃないぞ」

後ろを振り返ると護衛の一人がつかつかと歩み寄ってきている。

左手には槍のような凶器まで持っていた。こんな物を何のために使うのだろうか。

「許可証でも持っていない限りここは通さん。客席に行きたいのなら向こうへ行け。お前じゃ無理だろうけどな」

護衛は口元に笑みを浮かべながら、キルと名乗る男が行った方向を指差す。その笑みに苛立ちを感じた。

「すいませんけど、僕、ハンターです」

カイはそう言い捨てると、前で偉そうに立つ護衛の細い体を軽々と突き飛ばし、腰に巻いた防具の一式や太刀を見せ付けるように闘技場へと足を歩ませたのだった。

誰もいない質素な準備室の中で、自分の防具を広げた。

なめした動物の革を下地にし、胸と両腕両足の大事な部位は鉄のパーツで補強されている。一応それでも駆け出しの装備だということとは、これまで見かけたハンター達の物と比べてみても歴然だ。

防具を持ち上げ、体をその中に押し込んだ。ヘルムを被り、ベルトをはめ、ブーツを履く。防具に取り付けられた鉄板が重なり合う小刻みな金属音だけが空虚な部屋を満たした。

「これで準備できたつと」

近くにある等身大の鏡を見ると、別人のように映る自分の姿があった。本当にハンターになったという満足感到達された。だが慣れていないのか、想像以上に重たくて動きづらい。

突然、入り口のほうから足音が響いてきた。足音は大きくなり、一人の老人が顔を覗かせる。その顔には見覚えがあった。

「あつ、広場で会った……」

「ずいぶんとやる気のようにゃの」

老人はにんまり笑うとカイの防具をじろじろと眺めた。

「ほう、武器は一流じゃのう。こんな高価なものを一体どこで？」

「自分の家で」

「ほう、鍛冶屋なのか」

「売れてませんけどね」

老人はしばらくの間、訝しい表情でカイの顔を見続けた。

「似ているのう」

「えっ？」

何のことだろうか。

「いいや、なんでも無い。余計なことは考えるな。これからのことに集中しろ。引き返しても構わんぞ」

「いえ、行きますよ。死ぬわけでもないんだし」

カイは闘技場の最後の入り口へ続く扉を開けた。外の眩い日光が、一本の筋のように部屋を照らす。

『似ているのう』

たった今聞いたこの言葉の意味が胸の中に引っかかっていたが、それとまた別の響きが耳の中へ入り込んできた。

「ウオッホッホッホッ……」

幻聴ではない。そして、人間のものではない不思議な音色だ。微かだが、野生の独特の力強さが、体の中へと満ちていった。

「これがモンスターの鳴き声……？」

だが、足は止まらない。その声の主がいる場所へ、本能が導いていた。

そして俺は、この灼熱の砂の上を踏みしめた。
もう逃げ場は無い。

すぐそこでは顔に襟巻きがついた怪物が高々と咆哮を上げている。
紫色の体、背中の白い鬣、小さな前足と正反対の強靱な後足。ジヨ
ーが言っていた『ドスジャギィ』とはこれのことだ。

頭の中には『殺す』という単語が渦巻いていた。

ここで身を守るのは自分しかない。

飛竜刀を鞘から抜くと、刀身が独特の金属音を纏った。強く握り
締め、太刀を構えたまま自ら駆け出す。

怪物の鋭い眼光は、殺意を俺へと向けた。

……その眼光は、誰かのものと似ている様な気がする。

闘技場にて（後書き）

やっと来たぜ、バトルシーン！
それよりも、ありがたいことに、
お気に入り登録が一つあるのです
が、一体誰が？
どこを見ても分からない・・・。

死闘、ドスジャギイ（前書き）

死闘と言つほどでは無いけど、とりあえず主人公頑張れ。

死闘、ドスジャギイ

砂煙を上げながらドスジャギイが突進してくる。カイは正面から突き刺して終わりにしようと構えた。

……しかし、そんなに甘くはなかった。

ドスジャギイはあと少しの所で一瞬にしてカイを飛び越えたのだ。
「!?」

後ろを振り向いたときにはもう遅く、カイの左腕はドスジャギイの牙に捕らわれていた。これまで考えていた動きとは比べ物にならない瞬発力だ。

「くそっ、離れろ!」

すぐ目の前で紫色の頭が腕にかぶりついている。鋭い牙が、防具越しに肌に触れた。

いくら引つ張つても逆に痛みが酷くなるばかりで、腕から滴る血の量は増していく。

——駄目だ、ここでは自分を守るのは自分しかない! 太刀の持ち手で思いきり紫色の顔を殴った。すると、その体は安易に口を開け、腕を放すとジャンプで軽々と後退した。

瞬時にドスジャギイに噛み付かれていた自分の腕を確認する。牙は多少食い込んだようだが、防具のお陰でさほど痛くは無い。

「グオアアア!」

「はっ?」

目の前には既にドスジャギイがいた。巨体を横に向け、板の様にカイの体に打ち付ける。瞬間、カイの体は軽々と弾かれた。全身に鞭のような痛みが走る。今度は砂の上に落下し、背中が打ち付けられた。

「痛っっ!」

こんな所で体の痛みを考えてはいけない。すぐに体を起き上げらせ、モンスターの攻撃を避けなければならぬのだ。そうしなければ

ば次々と強烈な攻撃を喰らい、そのたびに起き上がる力を無くし、悪循環の波に飲み込まれてしまう。

カイは立ち上がり、こちらを睨むドスジャギイの動きに神経を集めた。

「グオオオオッ！」

まだこちらは何も攻撃していないというのに、ドスジャギイは怒り狂った目でこちらを睨む。モンスターは、人間を一つの種としか定めていないのだ。人間が、『小鳥は全て同じ』と思うように。

長く豊満な尾が振り回された。自分の体と同様の長さの肉の塊が目の前を風と共に掠めた。

「うつ……！」

後ずさり、気を取り直して太刀を構えた。今、遠心力に任せて尾を振り回すドスジャギイには大きな隙ができている筈だ。

ドスジャギイの動きが止まった。確かに、隙ができた。

「そこだっ！」

太刀を振り下ろす。刀身がドスジャギイの横腹の表皮を裂き、真紅の血が辺りの砂に点々と散った。その攻撃に繋げ、更に太刀を横へ降った。今度はドスジャギイの左足を斬りつける。

ドスジャギイが痛みに呻きながら瞬時に間合いを取る。強靱な足が砂を蹴り上げ、またしてもこちらへ向かって来た。そしてまた、微妙な距離で脅威の大ジャンプを繰り返した。

——— 今だ！

カイは一気に飛竜刀の刀身を振りかざし、真上のドスジャギイの腹を切り裂いた……つもりが、どうやら当たったのは足の付け根らしい。

着地の瞬間、ドスジャギイはバランスを失ったのか片足から崩れ落ちた。

起き上がろうともがいているが、足の出血量からして到底起き上がれないだろう。このままでは痛みにもがき続けるだけで、痛々しい光景が続くだけだ。

カイは歩み寄り、太刀の先端を垂直に突き立てた。

「うおおおっ！」

刀身をまっすぐに振り下ろすその瞬間、カイは動きを止めた。もがき続けるドスジャギイの体に注射針のようなもの突き刺さったのだ。

——一体どこから？

戸惑って辺りを見回している間に、足元の呻き声がぴたりと止まる。下を見下ろすと、白目をむき、口から唾液を垂れ流すドスジャギイがいた。

——これは明らかに自分のやったことではない……。

屈みこみ、ドスジャギイの背中に刺さった針を引き抜いた。

先端からはなにやら紫色の液体が滴り落ちている。刺激臭もした。

「これは何だ、最初からあったのか？」

カイは意味ありげなそれを、そつと懐にしまいこんだ。

『レイル・カイさんのドスジャギイの討伐は無事終了しました。門を開けてください』

どこからか男の声がした。おそらく監視員だろう。このドスジャギイの死は、カイが下したものだとは判断されたのだ。

納得のいかない感情を抑えながら、カイはドスジャギイの死体から離れた。

死闘、ドスジャギイ（後書き）

あれだけバトルシーンが書きたかったのに、いざやってみると、
なかなか思いつきませんね（涙
淒く短いです……。

狂気の火竜

俺は闘技場の物陰からスコープを覗きながら狙いを定めた。距離はざっと百mはある。

誰でもいい、とにかく誰かを殺す。

しかし、標的の周りでドスジャギイが動き回るためになかなか引き金が引けない。俺は苛立ちを募らせた。

あいつ・・・、俺と同じぐらいの歳だな。

くそつ、邪念を振り払え！殺すんだ、殺すんだ、殺すんだ・・・。突然、飛竜刀の少年がモンスターの下に回りこんで腹を切りつけるという荒業を繰り出した。

あんな歳で一体・・・？

しかし、腹を外して足を切りつけたらしい。それでも傷はずいぶん深いらしく、ドスジャギイは倒れたままもがき続けた。少年がその側に歩み寄り、止めを刺そうとしている。隙ありだ。

よし、今だ！

俺は何のためらいも無く、引き金を引いた。重たい銃声が響き、銃弾が一直線に飛んで行く。

・・・くそつ、外した！まだ百mは早すぎたか。

毒針は少年ではなく、もがき続けるモンスターに命中したのだ。意外なことに即死だった。

運のいい奴だ、これで諦めるしかない。気付かれないうちにそこを離れようとしたが、何者かがその先を遮った。

「君、人殺しって言うのはね、そんな殺り方じゃないよ」
全身リオレウスの防具をつけた、大剣の男。

「あんた、誰だ？」

「僕も君と同じで、あの少年を殺りたい」

何を言ってるんだこの男は？別に俺はあいつを殺す理由なんて無い。標的を転々と変えているだけだ。

「用は無いんだ、どいてくれ」

「人殺しと言うのはね、限界まで痛めつけて叫び声を搾り取り……」

「黙れ、用は無い！」

何なんだ、この胸騒ぎは……。

「師匠になつて欲しかったらいつでもおいで、こっちは楽しいよ」

俺は気味の悪い笑い声を背に、そこを離れた。

あいつは……、狂ってる。

狂気の火竜（後書き）

謎の新キャラ登場に、更に深まる赤い防具のハンターの謎。
さて、次は何を書こうかな。

休息（前書き）

短い&テキストです。
飛ばしても構いません。

休息

討伐を終えて準備室へ戻ったカイは、またしてもあの老人と鉢合
わせた。

「なかなかの物だったぞ。いくら年老いているとはいえ、あの早さ
で倒すとは」

「……」

「しかしドスジャギイの死体を回収した時に気付いたのだが、あれ
は毒死だった」

「毒？」

「しかしどこを見てもそのお原因は見つからなかった。原因の元は
お前が持っているはずじゃ」

原因……、それはもちろんあのことだろう。見張りをしていた監
視員が気付いていなかったというのに、この老人は易々と全てを見
抜いていた。

躊躇が生まれたが、カイは懷に手を突っ込むと、親指ほどの大き
さの白い針を手のひらに乗せて差し出した。老人はそれを訝しい表
情で見ると、瞬時にカイの顔へ向き直った。

「間違いない。毒針じゃ」

「知らないんです。いつの間にか刺さっていて……」

「それは分かっておる。どこからかガンナーが狙ったに違いない」

「それはどういふことですか？」

「お前がそのガンナーにドスジャギイを狙うように頼むのもありえ
るが、もしかするとお前を狙って外した可能性も考えられる」

「契約なんてしてませんよ！」

「そうかもしれない。実際、お前が狙われていた可能性が高いから
な」

「どういふことですか？」

老人はしばらく俯き、口ごもった。

「……今は言えん」

「どうして」

「それも言えん。機密情報になっているのだよ」

カイはそれ以上追求するのをやめた。第一、自分が狙われていたなんて馬鹿馬鹿しい。それに契約なんてした覚えも全く無い。他に何かあるのかを黙々と考えた。

「もう気にするな。今夜はジエン・モーランの撃退に向けての祝宴が開かれる。お前も行くといい」

酒場の活気は外にまで筒抜けだった。酔った男が歌う声がありありと聞こえる。

——こんな所に入るのか？

「カイ、ためらうことは無いって」

ヨウは無理矢理、躊躇うカイの背中を押した。

「お前も入るのか？」

「一人だったら入れないだろ、お前」

「こんな所に入ったら何されるか分からないよ。特にこの日は」

二人が酒場の入り口をくぐると一斉に視線が集まった。

「初めてにしてドスジャギイを瞬殺しためでたい兄ちゃんじゃねえか！」

酔いで顔を真っ赤にしたハンターがカイを指差した。

——こんな所だから酒場は嫌いなのだ。

カイの周りに人だかりができ、突然腕や足を掴まれた。胴上げだ。強靱な腕力を持つハンターたちは、カイなど簡単に上へ上へと突き飛ばす。

「そーれ、高いぜ！」

「この坊主、軽いな！」

「ぎゃあああああああ！」

カイの叫び声は、ロッキラッキシティの満天の星空に響き渡った。
……。

休息（後書き）

短文失礼しました！

カイもこんなキャラなんです。決してクール系ではないですよ。

狂気の行く先（前書き）

前の話ははつきり言って余計でしたよね・・・。
全部編集しよっかな？

狂気の行く先

星ひとつ無くなった暗闇の空の下、カイは痛む足腰にムチを打って家路を辿った。防具や武器は全て外し、まとめて背中にくくりつけてある。

……胸上げの後、どれほど辛い目にあったことか。遊びに散々付き添い、拳句の果てには酒を次々飲まされた。酒に酔った男達には世の中のルールなど無用なのだ。

大通りへ出ると何の音も無く特別湿っているわけでもないのに霧が出ている。かなり濃い霧で、すぐそこには白銀の暗闇だった。

「霧がこんな所に？」

道が分からない訳ではないが、得体の知れない光景に足がすくむ。「なんでここだけ霧が出るんだ？」

カイは恐る恐る霧の中へ足を進めた。

一步……、二歩……、三歩……、四歩……。なぜかこれだけで方向感覚を失った。

五歩……六歩……

霧の中に大柄な人影が見えた。その形には見覚えがある。

「カイ君、君の戦いは見させてもらったよ。でも残念だったね、止めを刺したのは君の実力ではないだろ？」

間違いない、この声は明らかにジョーと名乗った赤い防具のハンターだ。しかも、闘技場での出来事は極秘扱いだと……。

「あの、もしかしてジョーさんはハンターズギルドの職員ですか？」
そうだ、きっとそうに違いない。

「僕の職業はそんなものじゃないよ。もっとスリルがあるんだ」

——はっ？

「僕の仕事、知りたいかい？」

「えっと、差し障りが無ければ……」

「ふふ……」

姿の見えない相手は、不気味に笑うところ言った。

「コ・ロ・シ・ヤ」

「へっ？」

「なんて言っても依頼なんて受け付けないけどね。僕の気の向くままさ」

そんな事ありえるわけないだろ。自分で殺し屋なんて言ってるんだ……。

突然大きな影が近寄り、赤と黒の防具の鱗が目の前に迫った。

「そんな事を言っても、お前は信じないだろうがね……」

相手はヘルメットに両手を当て、持ち上げ始めた。

「でも僕の素顔を見たものは……」

カイは唾を飲み込んだ。

「みんな死ぬんだ」

露になった顔を見て、カイは目を見開いた。

——この男は……狂ってる。

次の瞬間、何かが腹を突き抜ける痛みを感じた。

「ぐっ……」

その場で身をよじり、体が反り返った。痛みのあまり叫びも出ない。

「大丈夫、君は死なせないよ」

不気味な猫なで声だった。

「君は特別だ。特別なオモチャ……」

もう一度あの顔を見ようとしたが、首が動かない。目の前が酷くぼやける。まるで自分の体が、自分の物では無いようだ。

「でもここには居させない」

カイは白銀の霧の中、意識を失い、ぐったりとうな垂れた。

「さて、こいつをどこにやろうか……」

俺は二人きりの霧の中で一人呟き、防具を頭にはめ直した。少年は俺の腕の中でぐっすり眠っている。

こいつに使ったこの薬なら、一週間は容易に寝かせてやれるだろう。

「……だがやはり痛すぎたかな？」

注射針に仕込んだ緑色の液体を覗いた。

注入する時、常人だと腹を突き抜かれるような痛みを感じるらしい。昔は、俺もそれが感じたくて何十回も打ち続けた。それでも何も感じない。他の奴らはこれで叫び声を上げるのか？あれが、「痛み」なのか！？

「もういい、それよりもこいつをどうするか……」

俺は考えながら、込み上げる笑いを必死に抑えた。

「砂漠の真ん中に捨てていくのも面白い。でもこいつ一人じゃ物足りないな」

この餓鬼に付き添っていたヨウとかいうお友達も面白そうだな。

だが仲良しだと助け合いなんてものだけだろう。

その時、背後から金属音が聞こえた。後ろを振り返るが、俺の仕組んだ霧のせいでも見えない。

「そいつを放せ、撃ち殺すぞ！」

その声には聞き覚えがあった。闘技場で声をかけた、人を殺し損なった少年だ。俺を尾行していたのだろう。自分はまだまだ迂闊だったか。

「その声はあの時のガンナーか……。お前なら俺を打ち抜いてもおかしくないな」

「そんなことより、腕に抱えてるその人形をどうするつもりだ」

「どうでもいいだろう。それとも、俺の仲間になるのか？」

「御免だっ！」

次の瞬間、鈍い銃声が聞こえた。奴は引き金を引いたのだ。その証拠に、銃弾は俺の防具を打ち抜ける筈は無く、胸の所で止まっていた。通常弾だろう。それにしても何て奴だ、これほど人の出やすい場所で銃声を響かせるとは……。

「面白い。人が来ないうちにお前を始末するか」

地面を蹴りだし、銃声のした方向へ滑るように移動する。目の前に影が見えたのと同時にその少年の胸に拳を叩きつけた。完全に隙有りだ。

ドサッ

少年は何も言わず、脱力して倒れた。もちろん殺してはおらず、ただの気絶だ。

「気味が一番良さそうだったな。アヘン君……」

何も聞こえない筈の少年の耳元に、ゆっくりと囁いた。

そう、この少年の名は、『アヘン』。俺が狙い続けた標的だった。

狂気の行く先（後書き）

さて、ただいま私はこの小説で、ある企画を考えている所です。
まだ先のことは分かりませんがお楽しみに。

脅威の角竜（前書き）

最近、久々にメトロイドをやりました。

いやぁ、あれは僕のゲーム史に残る作品ですよ。……関係ないですよね。

脅威の角竜

生暖かい風、纏わり付く砂、砂漠の匂い……。カイは違和感を感じて目を覚ました。

——ここは？

体の節々に痛みを感じながらも立ち上がり、周囲を見渡した。360度全てが砂ばかり。つまりここは砂漠なのか。

——なぜ？

頭の整理がつかない。目覚める前のことを思い出してみた。

赤い防具のハンターの顔……。

腹を突き抜ける痛み……。

『君は、特別なオモチャ……』

『でもここには居させない』

彼の言葉が最後の記憶に残っていた。しかし顔だけがうまく思い出せない。ただひたすらにショッキングだったとしたか。

で、今自分はどうすべきなのか……。

答えは一つしかない。とにかく、戻らなければ。どこでもいいので人里を見つけるべきだ。どこへ進めばいいのか見当は付かないが、ふと自分の体を見ると、太刀も含めて自分の装備が全て着せられ、腰にはなにやら黒い袋が付けられていた。

中を開けてみるとそこには角から作った水筒や、食料らしき肉の断片が詰め込まれている。

——もしかしてあの男が持たせたのか？俺に生きるチャンスを与えているのだろうか。

とにかく日光がひたすらに暑いので、この不毛の地で木陰の一本でもないかと砂の上を進み始めた。しかし、地平線の先までどこまでも砂ばかりなのを見ると歩く気力が失せてしまう。陽炎は、どこまでも続いていった。

ずいぶんと長く歩き続けた。

それでも何も見当たらず、精神的、肉体的にも限界に来ているのかも知れない。変わっているのは太陽の位置と、カイの影が伸びただけ。

突然ポーチに入った肉の存在を思い出し、砂にどっかり腰を下ろした。

——いや、待てよ。まさか毒が仕込まれているのでは？

「……そんな事どうでもいいか。食べなくても死ぬだろうし」と、思った瞬間。

「……ん？」

何か違和感を感じる。砂が振動しているような……。

カイはそつと砂の上に耳を当てると、小刻みに音を聞いた。しかも徐々に大きくなっている。耳を離して周りを見回すが、音源らしきものはどこにも見当たらない。見えるのはひたすらに、砂、砂、砂……。

——気のせいかな。

と思ったが、音は嫌でも耳に入ってくる。

恐れを感じ、その場を立ち去ろうとしたその瞬間、突然近くの砂が盛り上がった。

「……」

砂の中から巨大な角が二本、次に岩のような巨大な顔、翼の付いた砂色の胴体は、いとも簡単に砂を押し上げ、全身を露にした。

全身が砂と同じ色で、硬そうな皮膚が頭から尻尾まで続いている。頭自体は小さく、その周りに巨大な板が張り付いているような感じだった。その板からねじれた角が二本突き出している。前足は無く、その代わりに大きな翼があり、尻尾の先端には岩のような突起があった。

「こ、こ、これってもしかして……」

——ディアブロス！？

間違いない。随分前に資料で見たものとほとんど同じだった。しかし、想定外の大きさに我を忘れる。

ディアブロスは自分の存在に気付いたのか、表情の無い小さな目を自分へ向けた。

——や、やばい……。

カイは背を向けないようにしてゆつくりと差を開こうとした。が、縄張り意識の強いモンスターがそう簡単に見逃してくれるわけが無い。ディアブロスは足を踏み鳴らすやいなや、角を低く構えて猛然とダッシュを繰り出した。

「なななななっ……！」

カイはすかさず横にジャンプし、ギリギリで角をかわしきった。

極度の緊張が頭の中で頭痛を起こす。

更に、今日の前を掠めたディアブロスの大きさはたいしたもので、頭だけでも自分の身長を超えていた。こんなものが当たって骨が折れないわけなど無いだろう。

ドスジャギイしか倒していない自分にこんな物が倒せるはずはない。もつとも、止めを刺したのは自分ではないが。

そんな事を考えている間も無く、ディアブロスは頭を高々と掲げ、とてつもない高音を放った。

「キャオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

「ぎゃあああああああああああ！！」

いくら声を上げて耳を塞いだ所で、何の効果もなかった。咆哮が止んだ後も、酷い耳鳴りで周りの音が聞こえないほどだ。

「なんでだ、何で俺を狙うんだ！」

そんな言い訳が野生の脅威に通用する筈も無く、ディアブ羅斯は砂煙を上げて次の突進を繰り返した。

「わわわわわわっ！」

すかさず横へジャンプ。そして、とにかく逃げた。少しでも危険から身を守るために。

空腹を忘れて走り続けると……。

「……あれ？」

後ろを振り向くと、そこには何も無い。遂に危険が去ったと思い、胸を撫で下ろしたその時、背後から砂の落ちる音がした。

そして、そこにはいつの間にか先ほどのモンスターが。このままでは埒が明かないかもしれない。

カイは鞘から飛竜刀を抜き出した。刀身が独特の金属音を纏う。

「おりゃあああああああ！」

無理も承知で自ら駆け出した。しかし突然、前のディアブ羅斯は何もしていないのに関わらずに咆哮が鳴り響いた。

「キヤオオオオオオオオオオオオオオ！」

「ぎゃっ！」

遠くから聞こえたためにさほど酷くもなかった。しかし……、恐る恐る後ろを振り向く。

そこには……、自分めがけて突進をする、もう一頭のディアブ羅斯がいた。目の前の光景が信じられない。砂漠に来て早々、ディアブ羅斯が二体だなんてありえるのか！？しかも自分は今、その中心に突っ立っている。

「ほっ！」

少しだけ慣れた動きでディアブ羅斯の角をかわした。次の猛攻を避けるため、更に視線を移す。しかしそこにあったのは、更に目を見張る光景だった。

二頭のディアブ羅斯は互いの角を絡ませて激しいバトルを繰り広げている。どうやら狙いはカイでなくその後ろに居たディアブ羅斯のようだ。

またとない幸運に胸を躍らせ、慎重に二頭から離れようとするが……。

——何かおかしい……。

何か大事なものを忘れている気がしてディアブ羅斯の真下に目をやった。

「飛竜刀が！？」

回避した時、知らずに手から放していたようだ。ディアブ羅斯は互いに集中して動いてないから大丈夫だと自分に言い聞かせ、恐る恐る、元へ戻った。

いつ襲われるか分からない恐怖に駆られて、引けをとらずに押し合い続けるディアブ羅斯の側に戻って手を伸ばした。

巨大な頭は角を水平に保っており、太刀がその側に転がっている。

——掴んだ！

瞬間、まるでそれが引き金になったかのように、二頭が突然頭を放し合った。

「グギャアオ！」

「グガアアア！」

突然の動きに動揺したカイは、思わず尻餅をつく。そして次の瞬間、巨大な何かか風を切って目の前を掠める。

「？」

今のは何かと辺りを見回すと、それが尻尾であることが分かった。押し合いでは埒が明かないと悟った二頭は、尻尾を振り回して乱闘を開始したのだ。

「グアオオ！」

一方のディアブ羅斯の尻尾がもう一方のディアブ羅斯の顔にクリ

ーンヒットした。

「グギャアア！」

ディアブロスの尻尾も頑丈そうな皮膚で、先端には鉄球とも岩石ともつかない物がある。これが人間に当たればどうなるか、想像しなくてもない。

そしてカイはその中心に居る。

すぐ頭上では、カイに気づかない二頭の尻尾が飛び交っていた。邪魔な物は尻尾だけではなく、動き回る足も更に危険だった。匍匐前進で進んでも気付かれぬまま踏み潰されるだろう。しかし、ここでじっとしているのも充分危険である。

突然、辺りが暗くなった。

上を見上げると、ディアブロスの足がすぐ頭上に迫っている。

「うわっ！」

転がってどうにか避けることが出来た。体のすぐ横で、今避けたディアブロスの足が砂を踏みにじる。

「ギャオオオオ！」

「グアアッ！」

うつ伏せになったカイの目の前をディアブロスの腹が覆った。そこにすかさず太刀を突く。

「キャオオオオオオオオ！」

「うっっ！」

鼓膜が潰れそうになるが、カイは必死に両手で刀身をのめり込ませた。刀身を伝って血が流れ、咆哮も次第に小さくなってゆく。それと同時に、弱ったディアブロスの顔に尻尾の先端が直撃した。派手に血飛沫が舞い、辺りの砂が赤く染まった。

「グウアアアアッ……」

止めをもろに食らったディアブロスは片足から崩れ落ち、巨大な体はカイの横に横たわった。

しばらく砂煙が上がり、おさまった頃にはピクリとも動かない。しかし、終わったわけではない。モンスターはまだもう一頭いる

のだ。その目が露になったカイを睨みつけている。

カイは、更なる覚悟を決めた。

脅威の角竜（後書き）

もちろんカイの仲間もじきに登場しますので。
二、三部ぐらい後ですかね。

ボロミヤ・アヘン（前書き）

ふう〜、やっとディアブロスも終わりです。
題名がどういう意味なのかは秘密です。

ボロミヤ・アヘン

さて、あの男を潰す前に、この砂漠をどう抜けるか考えなければならぬ。

霧の濃い時、突然不意を突かれて赤い防具のハンターに殺されたと思ったが、目が覚めると俺は砂漠のど真ん中に横たわっていたのだ。どういうわけか装備もそのまま、弾丸も逆に増えている。つまりあいつはまだ俺を殺すつもりは無いのだろうか？

腰についた水筒の水を一口飲むと、遂に底を尽きた。歩き続けてどれほど経ったのかは分からない。ただ、太陽はとつくに俺の頭上を通り過ぎて、向こうの地平線に沈もうとしている。

足も棒のようになっていた。

——これ以上は無理だろうか。

俺は遂に砂の上に座り込んだ。もうだめだ、これ以上は何もできない。

今まで何人殺してきたのだろうか。これまでの人を殺す瞬間が、走馬灯のように蘇る。

不意を突かれて即死する者、泣き叫ぶ者、衰弱していく者……。いいや、全てはしょうがなかった。俺だってあんな事……。

不意に遠くから甲高い叫び声が聞こえた。我に返った俺は、ふらふらと立ち上がって近くの盛り上がった場所へ急ぐ。周りを見渡すと、なにやら巨大な物が激しく蠢いているのが見えた。ボウガンを構えてスコップを覗く。

そこには、信じられない光景があった。ディアブロスが二頭、そのうちの一体は横たわったまま動いていない様だ。もう一頭は何かに向かって威嚇をしている。

「!？」

そんな事があるのか!？

そこにいたのは、ハンターシリーズの防具に身を包み、飛竜刀を

振りかざす一人の少年だった。間違いない、あいつは闘技場で俺が仕留めそこなつた獲物だ！しかもたった一人でディアブロス二頭に挑むのは不可能だ。どういう偶然なのかは分らないが、ここは片付けた方がいいのだろうか。

俺はその場で、静かにボウガンを構えた。距離は前の倍の、200mほど。

何に当たろうがどうでもいい。ボウガンに拡散弾をセットすると動き回るディアブロスの頭に狙いを定めた。

ディアブロスは猛然と風を切って走り出した。カイはタイミングを見計らい、ディアブロスが目の前に来た瞬間横に避けると同時に太刀を胴体に突き刺す。

「ヴァアオオ！」

皮膚が硬いために全く刺さらないが、少しでも痛みは感じているらしい。これが続ければ徐々にこのモンスターの体力を削れるのだろうか。おそらく、ないだろう。

ディアブロスは体勢を立て直すともう一度カイに向き直り、頭を低く構える。カイは次の突進に身構えたが、突然ディアブロスが予想外の行動に出た。大きな翼と角で砂を掻き分け、見事に巨体を砂の中に埋めたのだ。

狩りのことにましてや、ディアブロスの事もほとんど知らないカイは、砂の中から攻撃を仕掛けてくるなどとはまだ考えていない。周りを見回しても夕焼け色に染まる空と砂ばかり。

しかし、やはり次の瞬間足元の砂が盛り上がる。突然のことに力

イは尻餅をついた。

「わわわわわっ……？」

近くの地面から角が突然生えたかと思うと、その下から更に巨体が投げ出されるように軽々と現れた。

「グオオオオオオ！」

押し上げられた砂が大雨のように降り、辺りの視界が遮られ、360度全ての方向に何の目印も無い砂漠では方向が分からなくなってしまう。しかしその自然の強さに耐え抜くモンスターの感覚は、たとえ幾つかが失われていようとも人間をはるかに上回っている。その証拠に、こちらを既に察しているらしきディアブロスの声が聞こえてくる。

「ヴァアオオ！」

ズンズンズン……、突進する足音が迫ってきた。しかしどこにいるのか分からない。砂を掻き分ける音の中、カイは耳を研ぎ澄ませた。

緊迫していたその時、思いもよらぬ音が耳に聞こえた。ディアブロスとは無関係の筈の……。

「死ね！」

——自分の声ではない。一体どこから？

瞬間、目の前に爆炎が広がった。辺りの砂が飛び、カイも焼け付くような熱風によって派手に吹き飛ばされる。

「ヴォアアアアウウウウウ！」

ディアブロスが頭を上げて身悶えるのが見えた。しばらくして炎がおさまり、辺りの砂が黒く焦げているのが分かった。その中心には頭の皮膚がぼろぼろと崩れ落ちた、痛々しい姿のディアブロスがいた。

「ヴウウウ……」

また先ほどの声がした。

「死ね！」

ディアブロスの辺りに黒い粒が飛び散った。皮膚の所々が割れて

いく。

「ヴウウウウ……」

突然の強烈な不意打ちに多々の傷穴を負ったディアブロスがゆっくりと体を崩れさせる。死んではないようだ、どうやら既に体力よりも、先ほどの同類との互角の戦いによってスタミナを大きく消費していたのだろうか。

緊張が幾らか解け、視線を向こうの斜面へと移す。一人の青年が滑るように駆け下りて来るのが見えた。自分と同じ歳だろうか。両手に一つのボウガンを抱え、紫色の防具に身を包んでいる。

「誰だっ!？」

思わず大声で尋ねたが、向こうは何の返事もしない。ボウガンを持ったまま、冷たい眼差しでカイを見続けた。その傍ら、ディアブロスは弱ったためか、ゆっくりと砂の中に潜って行く。

……しばらく沈黙が走る。

突然向こうのガンナーが、武器をその手に、尻餅をついたままのカイに歩み寄ってきた。とは言っても差は程々に開いてある。だが思いもよらぬことに、向こうの銃口は確実にカイへと向けられていた。

「お前、やっぱり闘技場で見た奴だな。せつかく止めを刺してやつたんだ。感謝しろよ」

「止めてあの毒針!？」

「静かにしろ。奴が戻ってくる」

その目は明らかにこちらに向いているが、カイにはそのガラスのような感情の無い眼差しが、空虚なこの世界しか映っていないと言わんばかりの目のように思えた。まるで、感情を持たない眼差し。疲れかストレスのせい、目の下には大きな隈ができています。

「お前、もしかしてキル・ジョーとか言う奴の手下とか？」

「そんなのこっちが聞きたいぐらいだ。俺だって好きで来てるんじ

やない」

ますますわけが分からなくなる。だが彼の指が有無を言わせずに、引き金に力をこめるのが見えた。

「死ぬ前に俺の名前を聞かせてやる」

正直そんなことはどうでも良かった。

「どうしてこつちに銃口を向けるんだ、何の関わりがあるんだ!？」

「『ボロミア・アヘン』。聞いたことあるか？」

引き金が引かれる。カイは思わず目をつぶり、死を感じた。いつ銃弾が体を過ぎるのだろうかと感じたが、時間が長いのか、それとも向こうが躊躇っているのか、なかなかそのときは訪れない。逆に、『早く来い』と念じている自分さえもいた。

が、突然目にも留まらぬ速さで、何かが二人の間を遮ったのを感じた。

「何つつつ!？」

突如として砂から飛び出た角は、見事にアヘンの腹を突き上げた。彼の体は宙を舞い、背中から砂の上に派手に落ちていく。おそらく先ほど爆発を受けたディアブロスが返り討ちにされたのだろう。

アヘンの落ちた場所からは微かに呻き声が聞こえる。

「ヴウウウウ……」

ディアブロスは辺りを警戒している。カイはディアブロスの視界に入らないように必死に身を伏せた。この茶色い防具なら保護色になっけてくれているのだろうか。

ディアブロスの目はほとんど見えず、聴覚だけを頼りに生きていると聞いたことがある。このままじっとしていれば大丈夫なのかもしれない。危ないのは呻き声を上げているアヘンだろう。

ディアブロスの視線は何度も二人を素通りし、しばらくすると砂の中に身を沈めて行った。しばらく砂の中を進む音が伝わってきたが、次第に小さくなり、やがて辺りは乾いた風の音だけに包まれた。「行った……のか？」

しばらくして安全を確かめると、カイはそつとアヘンの落ちた場

所へと歩いた。腹から血を流してピクリとも動かないが、息はしているようだ。だからといって、これを担いで砂漠を歩くのは無理だろう。それに、いつ命を狙われるか分からない。が、限界が来てるのは自分もそうである。

突然空腹を思い出し、太陽が沈んだために砂漠の気温も下がっていることに気付いた。目の前が酷くふらつき、立っていられない。腰の袋に手を伸ばそうとするが、動く気力が無かった。

横から虫の息のアヘンが囁く。

「殺すのは仕方が無かったんだ。ここで死んだら終わりだ……」

どういうことだろうか。何の訳があつて人を無差別に殺すのか？それを聞く余裕もなく、意識を失い、二人は同時に凍える砂の上でうな垂れた。

名も無い村（前書き）

ああ、明日からまた学校か。でも家にいるほうが暇だしな…。

そんな事はさておき、ディアブロス戦も終わって物語は新展開へ。カイトに待ち受ける試練とは？

名も無い村

カイが目を覚ますと、そこはどこかの室内だった。

「おお、やつとこさ目を覚ましたべか」

隣には知らない老婆が腰掛けている。

「ほんとびっくりしたべよ。ホットドリンクも持たずにあんな寒い砂漠で狩りをするなんぞ自殺行為だべ」

語尾についた「だべ」は何なのだろうか。いや、それよりも大事なことは……。

「えつと、僕は一体……？」

まだ状況が把握できない。自分は何をしてここにいるのだろうか？

「あんたらみたいな子供二人でディアブ羅斯を狩るなぞたいした者だべ。もう一人のほうは酷い怪我なのにとくに起きてるべ」

その途端、過去の記憶が電撃のように頭をよぎった。もう一人の方とは自分を殺そうとしたアイツでは……。

途端にドアが開き、隙間からあの顔が覗いてきた。虚ろな目に大きな隈。

体が勝手に戦闘体勢に入っていた。

「お、お前は……」

「……お前か？俺を助けたのは」

アヘンは表情も無く、そう言ったただけだった。

「へっ……？」

いいや、人目に付く場所ではおとなしくしてるのだろっ。とりあえず人のいる場所なら安全のようだ。

「三日前、村長が砂漠で倒れてるのを見つけて連れて帰ったんだべ」
「みみみ三日前！？」

ロックラックから遠ざかっているようであれば随分ヤバイ。いや、距離は長くて大丈夫。道さえ分かれば……。

「あの、ロックラックって場所知ってますよね？」

あれほど大きく、知名度の高い街なのだ。砂漠地方で知らないものはない。しかし返ってきた答えは、

「そんな物見たことも聞いたこともないべ。地図にも載ってないべ」
「俺の帰る場所もそこなのか？」

更にはアヘンが訳の分らないことを言う始末だ。

「友達ならしつかりするべ！」

「と、友達って・・・」

「とりあえず朝食だべ。怪我もしてないみたいだし、外に出ても大丈夫だべ」

老婆に腕をつかまれ、訳の分らないままベットから引き摺り下ろされた。体の節々が痛む。

「痛っ！」

「こつちだべ！」

ひどく急かしてくる。こちらのことも考えて欲しい。

食堂、とはいっても随分と粗末は室内に着いた二人は粗末な椅子にどっかりと座り込んだ。アヘンの腹回りには包帯が巻かれていた。中心が赤く滲んでいる。記憶が正しければ、アヘンはあの時、自分の目の前でディアブロスに腹を付かれた筈だ。

「なあ、色々教えてくれよ。俺のこと」

「えっ……？」

「記憶が無えんだ。自分が何なのかも分からない」

「えええええっ……？」

「まさか、お前もか？」

そんな事はない。全てが鮮明に蘇る。

『俺の名はボロミヤ・アヘン。誰も名を知らない連続殺人鬼』
そう言って引き金を引く姿。

本当のことを言えば事実を思い出させて殺されるかもしれない。それだけはどうにか避けなければ……。

「えっと、名前はボロミヤ・アヘン」

さつきから頭の中で復唱していたために思わず口が滑ってしまった。それでも向こうは石像のようにじっとこちらを見ている。まあ名前ぐらいは後から訂正も出来るが、さほど危険でもないだろう。

「で？」

「ただの通りすがりで会って、突然モンスターに襲われただけ」
とりあえず適当に言ってみた。

「そうか……」

アヘンは表情を一つも崩さず、椅子に深くもたれかかり俯いた。記憶を搾り出そうとしているのだろう。

突然背後の扉が開き、小さな子供が頭にトレイを載せてやって来た。いや、子供にしては歩き方がおぼつかない。よくよく見てみると、トレイを運んでいるのは白と茶色の毛の色からなる、アイルーだった。ロククラックでも人語を話すアイルーはたまに見かけるが、そんな者は都会にしかないものだと思い込んでいた。

「アイルーが働いてる！？」

「ニャ〜」

アイルーは有無を言わず、頭のトレイを差し出してきた。

「この村はまだ人が少ないからアイルーにもいろいろ手伝ってもらってるんだべ」

知らぬ間に先ほどの老婆が立っている。ここに来てから、いろいろな意味で驚きの連続だ。カイがトレイを受け取ると、たどたどしい足取りで外へ出て行った。

ちなみに朝食とは、ご飯とスープの簡単なものだった。それでも腹が減っていたので十分美味しく感じる。

「それにしても、村長が二人を呼んでたべ。食べ終わったらすぐに来るべよ」

食事を終えた二人は外に出て、アヘンの案内で村長の家へ向かった。どうやら彼は自分よりも二日も目覚めていたらしい。

更に驚くことは、この村は最近出来ばかりで、外に出ているほとんどの男は木材を運んだりしていることだ。なんと一週間もたつておらず、全く落ち着かない雰囲気だ。そしてこの村には、まだ名前も無いらしい。手伝いに来ているアイルーも何匹かは見当たる。「ここだ」

そこは、村長の家と言うにはかなり粗末な気がした。木材や藁の有り合わせで作った感じである。

「おう、やっと目が覚めたか！」

突然向こうから出迎えてきたのは、ずいぶん体格のいい、中年男。「ディアブ羅斯を倒したんだってな。この年でなかなかのもんだ！」
ごつごつした手が伸び、カイの頭を撫で回した。

「その兄ちゃんはどういうことか何も思い出せなくなってな。でも命が無事で何よりだ」

「それで、どうしてここに？」

「いやあ、一人前のハンターだと見込んで頼みがあるんだ。いわゆるクエストってやつか？」

「クエスト……」

ハンターという立場は長年の夢であったが、今はそれよりも故郷へ返らなければならない。

「そんな事をしてる場合じゃないんです」

「迷子か？」

まあそういうことだろう。しかし自分からなったものではない。

『ここには居させない……』

あの男、ジョーの言葉が蘇ってきた。この事実を伝えるべきなのだろうか。しかし……。

「ロッキラックという場所に帰りたいたんだろ。無駄だ」

「どうしてですか？」

「そんなところに行くには最低五日はかかる。その間にはもう封鎖されてるはずだ」

「封鎖？」

「ジェン・モーランだよ。この村を興してすぐにそんな情報が入ってきた。まあこの村は進路から外れているらしいから、気に留めることはない」

あの赤い防具のハンターはどうやってあんな場所へ連れて来れたのだろうか。おそらく十日は経っているかもしれない。

「とりあえず頼みを聞いてくれるか？」

どうせすることがないのなら、そうした方がいいのかもしれない。危険は百も承知だ。

「この村は崖の上に造っててな。この下には砂原がある。もちろんモンスターもうじゃうじゃいるぞ」

それにしては随分陽気な口調である。

「ジャギイやボルボロスが出てても問題ない。こんなところには上ってこれないからな」

「飛竜もいないんだよな？」

突然アヘンが口を割った。

「それがな、厄介な鳥竜種が出てきたんだ」

「ドスジャギイ？」

今度はカイが口を挟む。

「違う、クルペッコだ」

「クルペッコ……？」

カイは首を傾けた。村長がそれを見て、目を丸くした。

「ディアブロスも倒せるんだからクルペッコぐらい余裕だろ、なっ？」

村長はアヘンに向き直った。

「傷もまだ完全には癒えてないだろうから行かなくてもいいぞ」

「いいや、行く。何か思い出せるかもしれない」

「無理しないでいいから、残ってて！」

アヘンと二人きりなんて考えただけでもぞつとする。

「はっはっはっ、友達思いだな！」

村長は何も分かってくれない。頼りがいが無さそうなので、別にいいが。

「そういうことだ、がんばって来い！」

「今日!？」

「弱っちなあ……」

先ほどから、このオヤジには頭が来る。

もういい、獲物をしとめて目に物見せてやる！

結局アヘンも同行することになってしまった。

紫色の鮮やかな防具はジャギイシリーズという種類らしい。何枚かのドスジャギイから採れた革を重ねたぐらいの物だが、これのおかげで、ディアブロスから致命傷を受けずに済んだのだろう。しかしそれと引き換えに、彼は記憶を失ってしまった。

キャップは頭に被るだけの物だが、ガンナーらしくゴーグルが付いている。胴体には筒が並んだ帯をまとっていた。腰からもいろいろなものをぶら下げており、ポーチや弾丸の他には手のひらにも収まらないような装置がある。とにかく、ガンナーは荷が多いということだ。

彼の使う武器はヘビィボウガン。骨を主に使っているらしく、名

前通りに重たそうである。

「カイ、行こうか」

アヘンが先に歩き出した。それに続き、カイも間を空けながら進んでいく。

まだ彼には心は全く許せないが、ひとまずは二人同時で『クルペツコ』という名のモンスターを狩ればいいのだろう。どのような姿で、どれほど凶暴なのかは想像に任せるしかないが、とりあえず二人は未だ知らない未開の地へ、足を踏み入れた。

クルベッコの狩獵（前書き）

自分で言うのもなんですが、進み具合がぐんぐん伸びていきます。
もう受験生なのにこんな事をしていいのか！？
ああああっ・・・・・・・・。。。

クルペッコの狩獵

いつもより大きく見える太陽は、いつもより眩しく、そしていつもより暑い。今は日の当たらない浅い谷間を縫うように進んでいるが、暑く乾いた空気はどこに居ても追いかけてくる。時折流れてくる風は心地よい筈も無く、熱風としか感じられないほどだった。

「カイ、クルペッコって何だ」

「そんな事聞かれても知らないよ。俺はまだ駆け出しなんだし」

先ほどから、自分の後ろに並んでついて来るアヘンが無機質な声で次々と質問を浴びせてくる。まるで好奇心旺盛な知りたがり屋にしか聞こえないが、彼の冷めた表情を見ればそのイメージと遠くかけ離れていることに気付く。もちろん、記憶を失えば全てが気になる筈だ。得に自分の事に関しては。しかし教えることはできない。そんな事をすれば、自分の命の危険も考えられる。

短い時間で観察した結果だが、態度や本能は変わっていても、ボウガンを扱う技術に関してはほぼ0に等しくなっているだろうし、何より彼には、カイの知る限りは今までモンスターを狩った経験はない筈だ。アヘンが背負っているボウガンは、人間の腸を打ち抜くために使われていた。それを考えただけで背筋が凍り、何度もアヘンの様子を伺ってしまふ。しかし彼は相変わらずの冷めた表情でカイの後について来ているだけだ。

「さっきからじろじろ見るなよ」

アヘンが眉間にしわを寄せてこちらを睨んでくる。その語の無言の剣幕に耐え切れなくなり、カイはまたしても気まずい表情で顔を背けるのだった。

歩き続けてほどなく経つと、またしても開けた場所に出てしまった。強烈な日の光が瞳を襲ってくる。

ブオン……ブオン……

鈍い羽音が耳に入ってきた。カイの全ての神経が一気に研ぎ澄まされ、360度全ての光景に目を配る。しかしその音の正体が上から現れたことには気が付いていない。

瞬間、ドスン、と地面を踏みにする音がした。背後を振り向く。

先ほどと変わっていないはずの光景の中に、一つの異様な物が佇んでいた。

「!？」

瞬間、カイはアヘンを掴み、一気に岩陰へと飛び込んだ。今見たのは何なのかは定かでは無い。しかし、カイの本能が瞬時に『逃げる』と叫んだのだ。しかしアヘンも同時に引きずり込むのは自分でも以外だった。正直に言えば、彼にはいなくなつて欲しい筈だ。

「何すんだよ。俺もあの怪物には気付いてたんだが」

アヘンが腰をさするのを尻目に、カイは落ち着きを取り戻し、先程目に入つたはずの『怪物』を確認した。

「まさかこんなに早く見つかるとはな……」

「静かにしろっ……」

二人は岩の陰から見ってしまった。ひび割れた大地の中心に、標的であるクルペッコがきよろきよろと辺りを警戒しているのを。発達した嘴、火打石と化した手、鮮やかな背羽。村長に教えられた特徴とあまりに一致していた。

自然にできたとは思えないほど鮮やかに美しいが、その反面、バラのように危ない面は幾らでもある。ディアブロスと対峙したカイにはそれほど恐ろしくも見えなかったが、その記憶も失ったアヘンは緊張の面持ちで狙いを定めていた。

遂に見つけ出したというのに、ここでどこかに行かれたらまた振り出しに戻ってしまう。契約金や制限時間も無いと言えど、この厳しい環境でどこまで耐えられるかは時間の問題である。

「クッククック……」

クルペッコは喉を鳴らす様な音をのどの奥から発すると、頭を後

ろに回し、背羽の手入れを始めた。リラックスしているようだ。これを見る限りは自分達の存在に全く気がついてるのが伺える。不意打ちを狙うなら、今ここでアヘンがヘビィボウガンの引き金を引くべきだ。

「狙うなら今だ」

「黙ってる」

アヘンは岩陰から狙いを定めると、躊躇いながらも引き金を引いた。銃声と共に、通常弾は見事に嘴に命中した。

「クワアアアッ！」

あいにく何のダメージも無いようだが、アヘンの腕には驚いた。記憶は失っても本性は残っていたのだろうか。

「俺は一人で行って来る。援護を頼んだぞ！」

「分かっているから行って来い！」

アヘンの態度を尻目に置き、怯んだクルペッコに向かって走り出した。

「グワアアアッ！」

「おりゃあっ！」

飛竜刀を足に向かって切りつける。が、足の黄色い鱗は思ったよりも硬く、刀身は簡単に跳ね返された。

「硬いかっ！」

しかし瞬時に持ち直し、弾かれた反動で体を駒のように回し、遠心力をつけて攻撃を与えようとする。しかし突然、平らで硬い板のような物がカイの体を直撃した。クルペッコの尻尾だ。

「カッカッカッ……」

クルペッコはあざ笑うかのように喉を鳴らした。が、次の瞬間その顔面に銃弾が食い込んだ。アヘンの援護だ。

「グアアアアッ！」

カイはそれを逃さず、クルペッコの腹を切りつける。血は出ないが、赤い筋が浮かび上がった。

「しゃがんでろ！」

アヘンの方から命令が飛んできた。よく分からなかったがとりあえず屈もうとする。しかしカイがしゃがむ間もなく、銃弾は目の前を掠めてクルペッコへと一直線に向かった。一瞬の緊張で体が動かない。今この瞬間、目の前で風を切ったのは銃弾だろう。仲間がまだ攻撃の範囲内から抜け出せていないというのに、彼は何のためらいも無く銃弾を放ったのだ。

「グググググッ……」

アヘンの一撃であるのに、それが見える筈も無いクルペッコはカイだけを睨みつける。

「クアアアアッ！」

突然口を盛大に開け、カイに向かって噛み付こうとした。幾本もの小さな歯を間一髪でかわし、嘴はパコンと宙を噛む。

気付くとアヘンが岩の陰から出てきていた。

「近いほうが傷も深くなるからな」

そんな事言ったって、標的に近づくとなれば遠距離から狙えるボウガンの意味が無くなってしまふ。しかしよく見れば、銃口にはあの大きな装置がはまっていた。

「離れたほうがいいぞっ！」

それだけを言うと、銃口からは火花を散らす勢いで装置が飛び出し、その塊の鍵爪らしい物がクルペッコを捕らえた。次の瞬間、そこから爆炎が上がる。

そう、それはあの時砂漠で見た物と同じだった。炎はかなり小さいが。

「グアアアアアッ！！」

クルペッコは爆発によって派手に吹き飛ばされた。カイの付けた傷が大きく開き、血が溢れ出している。それでもクルペッコはよろよろと立ち上がり、二本の足で懸命に踏ん張ろうとしていた。

この光景を見ると心が痛む。モンスターは、この厳しい自然で懸命に生きている。人間に危害を加えるのも彼らが生きる為なのだ。実際、最初に彼らを襲ったのは森林を切り開き、生き物達の住処を

奪った人間なのではないのか？

それなのにアヘンは……、

「くそつ、やはりこんな雑魚弾じゃ殺せなかったか……」

アヘンは何の慈悲も無い。モンスターを狩る必要性はカイも分かっているが、もう少し慈悲を持って狩ができないのだろうか。

クルペッコは懇親の力を振り絞り、胸の赤い部分を張り裂けんとはかりに膨らました。そしてラツパの様に発達した嘴から奇妙な音を響かせた。

「アオオオオオオオオオツツ……！！」

「何なんだ、こんな時に」

アヘンが首を傾げるが、カイにはこれが何なのかが分かった。闘技場で聞いた咆哮……。

「気を付ける、あいつが来る！」

「あいつ？」

あいつとは他でも無く、ドスジャギイである。こんな自分でも分かるほど、クルペッコは正確な音色を操ったのだ。まさに神業である。

しかしそんな事に感心している場合ではない。もしこの周辺にドスジャギイがいるとなれば、仲間の声に反応して一直線に向かってくる筈だ。

「早くこいつを仕留めるんだ！」

アヘン無言では新たな弾を込め、狙いを付ける間も無く引き金を引いた。その弾とは散弾らしく、クルペッコの全身に小さな弾丸が降り注いだ。狙いを定めなかった理由も散弾だったからであろう。

「クウウウアアアアツツ……」

クルペッコはどこに隠し持っていたのか分からない力を振り絞り、羽を飛ばたかせようとしていた。

「あつ、ペイントボールは！？」

「何だそれ」

クルペッコは一扇ぎで宙に浮いた。

「色とか匂いをつけるやつ！」

「そんなもん剣士が持つてくるもんだろ！」

言い合いをする二人を待たずに、どんどん上昇していく。

「あつ、ペイント弾あつた」

「早く！」

アヘンは目にも留まらぬ早さでリロードすると、空高く舞い上がるクルペッコに狙いを定め、銃声を放った。風圧にも負けずに見事命中。さすがに匂いはこなかったものの、クルペッコの下にピンク色の粉が点々と降り注ぐ。

これを辿っていけば大まかな進路が分かるだろう。風が吹けば別だが。

「ふう〜、怪我も無しに一段落着いたな。」

アヘンはヘビィボウガンを起用に折りたたみ、背中に背負った。空の彼方へ消えていくクルペッコを見ながら、地面にどかりと座り込んだ。

あの時、あれだけの衝撃を受けて無事でいられるのも防具のお陰だろう。自分も防具に関する関心が湧いてきた。先ほどのクルペッコの尻尾の衝撃も、まだ痛みが治まらない。

「俺、何か忘れてるような気がするんだ」

突然、アヘンが口を開いた。

「何か大事な使命があつたような気がする……。でも思い出せない」それは、人を殺してきた事に関係があるのだろうか。

「ただ、一つ分かるのは、それを成し遂げるまで死ぬ訳にはいかなって事だ」

「いや、そんな事ないって。ただの思い過ごしだってば……」

過去のことはどうしても思い出して欲しくなかった。彼のためではなく、自分のため。

そんな中突然、背後から何者かの鳴き声がした。

「ガウツ、ガウツ、グギヤアアツ！」

足を踏み鳴らして現れたのは、もちろんの事、ドスジャギイだっ

た。闘技場で見た物とは比べ物にならないほど肉付きもよく、体の模様も生き生きとしている。その後ろにはジャギイも何頭か群れを成してこちらを睨んでいた。

「くそつ、いたのか！」

アヘンは折りたたんでいたヘビィボウガンを手にも、銃口をドスジャギイ達へ向けた。

「お前は先に行け、俺はここで食い止める！」

「お前、一人で大丈夫なのか！？」

何よりもあの傷だけが気がかりだった。岩陰から狙うように指示したのも無理をさせないためだったのだ。

「なあに、複数を一度に狙うのは簡単だ！」

アヘンは敵の様子を伺いながら、散弾をリロードした。

「後から来いよ！」

「当たり前だろ」

カイはクルペッコの行った方へと走り出した。風は無風。ペイントボールの粉は一直線に続いていた。背後からはアヘンのボウガンの銃声が聞こえる。きつと彼なら大丈夫だろう。一度殺されかけた身なのに、彼のこと気がかりだった。

クルペッコの狩猟（後書き）

かなりベタな展開になりましたが新鮮な気持ちでお願いします（汗

二頭同時討伐（前書き）

新規小説を増やしたので、これから投稿が遅くなるかもしれません。
暇があればそちらの小説も読んで、感想を下さい。

二頭同時討伐

手前に飛び込んできたジャギイに狙いを定め、すぐさま引き金を引く。しかし、いくら撃ち殺してもドスジャギイが呼び出すたびにまた現れ、ジャギイの死体が増えるばかりだった。

「くそつ、一步も近づけねえ……」

ヘビィボウガンでは素早い動きもできず、この場から動くのは難しい。傷のことにしても、あの老婆には念を押されていた。

「傷が開いたら動けなくなるべ。前転やジャンプも止めた方がええべ」

しかしこのままではドスジャギイに近づく前に暑さの餌食になるだろう。クーラードリンクは持つてきていない。持つて来ても使える状況ではない。とにかく、撃つ、撃つ、撃つ、撃つ……。

「ギヤオツ！」

不意を突かれて腕を噛まれた。大した事ではないが、一瞬腕の力が抜けてボウガンを落としてしまった。それを待っていたかのようにドスジャギイが動き出す。

「ガオツ！」

盛大に開かれた口が目の前に迫るが、反射的に腕で振り払う。すかさず側にあるボウガンを拾うと、ドスジャギイがまた後退した。そして入れ替わりにジャギイが襲ってくる。

ドゴン

ドゴン

ジャギイは次々と飛ばされて血を流す。

「てめえら、いい加減にしろっ！」

腰にぶら下げた最後の拡散弾を銃口に取り付け、闇雲に発射した。

それは地面に刺さり、次の瞬間、小さくはあるが爆炎が辺りを巻き込んだ。

「ギャオオオッ！」

「ぐっ！」

当たったのは自分も例外ではない。体が低く宙を舞い、乾いた地面に背中を打ちつけられた。

「このまま……じゃ……埒があかねえ……」

一人呟き、痛む体を無理矢理立たせた。向こうのジャギイは見事全滅。残るはドスジャギイ一頭。

覚悟を決めたアヘンは、ボウガンを折りたたんで背中にしまい込むと、ポーチから手のひらサイズの球を取り出した。

「くらえっ！」

球は怯むドスジャギイの手前に落ち、次の瞬間目を焼くような閃光が辺りを包んだ。アヘンは目を瞑っていたが、目蓋を通してまでも光に妬かれる。おそらく距離が甘かったのだろう。

カイはどうしているのだろうか。彼は一体誰なのだろうか？そんな思いが、頭をよぎる。

クルペッコは、光の差し込むオアシスで眠っていた。驚くことにこの場所の気温も適温で、モンスターが体を休めるには絶好の場所だ。

「よし、やっと見つけた……」

太刀を静かに抜き出し、それを構えながら無防備なクルペッコに近づく。

パキッ

枯れ枝を踏み、一瞬クルペッコの餌が止まった。カイの体も一瞬硬直する。が、深い眠りに戻ったクルペッコはまた餌を掻き始めた。「危ない危ない……」

小さく呟き、緊張を和らげると今度は地面にも注意しながら歩み寄る。こんな時になって大タル爆弾を持ってきていない事を後悔した。第一、そんなものを運ぶ物もあの村には無かったのだが。

「クアアア……」

クルペッコは水辺の近くで気持ち良さそうに餌を掻きながら目を瞑っている。止めを刺すなら今だ。だが、突き刺す場面を想像して身震いする。

しかしここは弱肉強食の世界。先にやらなければこちらが餌食になってしまう。それに翼を持つ為、崖の上に作られた小さな村にとっては危険な物なのだ。

覚悟を決めて頭に刃を向ける、次の瞬間、

「クワアアアアッ!!」

とてつもない勢いでクルペッコが起き上がった。

「わわわわわわっ!」

突然不意を突かれて尻餅をつく。目の前に巨大な影が、じわじわと迫ってきた。

「こんな所で……」

正気を取り戻し、太刀を強く握り締める。

「くたばってたまるかああああ!!」

「グワアアアッ!」

太刀を振りかざし、クルペッコの胴体に当てた。そのまま横っ飛びで更に振りかざす。

「ググググ……」

体勢を失ったクルペッコは、そのまま興奮状態になってカイに押し掛かってきた。横飛びですれすれにかわし、改めて太刀を構え直

した。クルペッコもすぐに体勢を立て直し、小刻みにこちらに向き直る。

「来るなら来いっ!」

体をぶつける攻撃ならほとんどかわす自信がある。が、クルペッコは未だ見たことの無い行動に出た。

「グアアオツ…グアアオツ…」

低い声を出しながら、リズムに乗るように両翼に付いた二つの石をぶつけ始めた。その摩擦から火花が散り、次の瞬間にはその火花が勢いに乗り、大きな爆炎が生まれた。その火打石を叩きながら力イに飛び掛ってくる。

「えっ?」

突然の不可解な行動に気を取られていたカイは完全に不意を突かれ、反射的に体を避けたのだがクルペッコの火打石から出る強烈な炎の勢いに吹き飛ばされてしまった。自分の防具に火が移っている事に気が付いたのは、懇親の力をこめて立ち上がった後である。

「あつつうつうつうつ!」

思わずその場でひっくり返り、必死の思いですぐその水場へ飛び込んだ。

ジュウウウウ……

防具の熱が音を立てて冷やされ、カイも火傷を受けずに済んだ。すぐそこに水があったのは不幸中の幸いだろう。

「クカカカカッ……」

クルペッコは何もせず、嘲笑うかのように喉を鳴らして飛び跳ねている。それに腹を立てたカイは立ち上がり、太刀を構えて走り出した。

「調子に乗るなああっ!」

「グワッ!?!」

クルペッコは突然の不意を軽々とかわし、ここぞと言わんばかり

に平たくて硬い尻尾を振り回し始めた。しかしカイはそれを見事に屈んでかわし、クルペッコの足を斬りつける。硬い鱗と共に血も飛び出した。

「グワアアアッ!!」

「うりゃあああああつ!!」

体制を崩して地面に倒れこむのを逃さず、カイは、その長い首に、懇親の一撃を浴びせた。

「グッ……グワアアアアアア……」

最後の掠れた叫びを上げ、クルペッコはその場に倒れた。辺りの石場に血が広がっていく。

「……倒した？」

カイは方を上下させて、ピクリとも動かないクルペッコを穴が開くほど見つめた。これほどの巨大な怪物を自分の手で殺したなど、実感が湧かない。

そして、出発する前にかけられた村長の言葉を思い出す。

『もしクルペッコが狩れたら羽や嘴も剥ぎ取ってくれよ。金になるからな!』

そう言っただけで差し出された剥ぎ取りナイフを取り出してみる。

すぐに目的を達成して、アヘンを助けに行かなければならない。

「いや、あいつならもう終わってるかな……」

そう呟きながらクルペッコの背羽に刃を添えて、次々と鮮やかな羽を剥ぎ取っていった。

二頭同時討伐（後書き）

ホントにバトルシーンは苦手です。

それで結局クルペッコを瞬撮させてしまいました（汗

紅蓮の騎士（前書き）

皆さん、気付いているかも知れませんが、あらすじを変えました。
これから作者の気まぐれで変わることがあると思いますが、その
時も大人な対応でお願いします。

紅蓮の騎士

「しかし参ったな。こいつを置いて行けないならしばらくはここから動けないぞ」

「いや、どうせロックラックには帰れないんですし」

ようやく眠りについたアヘンの隣で、カイと村長はこれまでの経緯について話し合っていた。カイがクルペッコを狩り終えてアヘンの居た場所へ戻ると、そこに血を流したアヘンの姿だけが残っていたのだ。なぜドスジャギイに喰われていなかったのかが不思議でならない。

「クルペッコが他のモンスターを呼び寄せるなんて知らなかったな。何せ情報もかなり規制されてるしなあ……」

「アヘンを待つ間にいろいろ狩りましようか？」

「そいつはありがてえ、モンスターが多いと村もやっていけなくなる。ちょうど紹介したい奴も居るんだ」

暖簾を潜ってカイは外に出た。

「ほら、あそこだよ」

村長が指差した先を見たカイは目を見開いた。村人と会話をしている後姿は、刺々しい装飾の、赤い防具……。赤い防具のハンターだったのだ。

「あ、あいつ……」

自分を砂漠の中心に置き去りにした男。無意識のうちに、鞘から太刀を抜き出して彼の方へと駆け出していた。

「くそおつ、許さねえええええ！」

敵はすぐにこちらへ気付くと、目にも止まらぬ早さで腕に着けた盾を構え、カイの攻撃を跳ね返した。

—— た、盾？

突然村長の腕に囚われ、身動きが取れなくなった。

「ばかつ、人に武器を向けてどうするつもりだ！」

村長の言葉など気に止めず、そのハンターの身なりを眺める。防具は明らかにレウスの装備だが、武器だけランスになっている。

そして遂に、頭の防具から声が漏れ出た。

「人に武器を向けるのはハンターとして重大な違反よ。私が何をしたのよ？」

「お、お、お、女？」

目を見開き、愕然とした。

「カイ、この美人さんはわざわざドンドルマから派遣された人間だ。何の関係があるって言うんだ？」

美人などと言われても、防具越しでは分からない。背中に背負ったランスは、背丈を超えて突き出ている。普通の扉も通れそうに無さそうだ。

「あなた、カイ君っていう子ね？ディアブ羅斯を倒したというのは半分嘘でしょ？」

「……へ？」

「何言ってるんだ。お前も見ただろ？こいつの側に転がってるのを」
村長が不満げに謎の女性に言った。

「…へ？」

自分だけ会話から取り残されていく。

「あつ、ごめん。実は村長が私をここへ送るときに見つけられたのよ」

「なるほど、一緒に同行してたんですね」

「そうそう。とりあえず立ち話もなんだから、中で話しましょう」

二人きりになった食堂で、延々と話を続けた。相手は頭の防具を

取っており、見た目からして20前半程の歳だろう。長い黒髪に整った顔立ちで、体も細身のようなのだが、男気溢れる眼差しはカッコよさを感じさせる。

「ディアブロスの体には太刀で付けられた傷もあったけど、あれだけじゃ全く死なないわ」

確か、あの時はまだアヘンはいなかった。彼が乱入したのは二頭目からである。

「結局は頭の傷が致命傷だったのよ。あんな物はよほどのハンマーでも付けられるものじゃないわ」

「じゃあ、僕がしたことは……」

「あなたはディアブロスの隙を作らせたただけなのよ。あなたとアヘン君が力を合わせても倒せるはずが無い」

というより、なぜこのハンターは二頭目が現れたことを知っているのだろうか。

「それとね、大事な話があるの」

彼女はポーチの中を探ると、一枚のチラシをつきつける。それを見た瞬間、身の毛がよだった。

「ええっ!？」

そこに印刷されていたのは、間違いなくアヘンである。簡単な手描きのようなのだが、しっかりと特徴を掴んでいる。

『ボロミヤ・アヘン』

罪：殺人・脅迫・強盗

特徴：現在はジャギシリーズの防具でハンターを装い、歳は十六、身長159cm

報酬：5億Z

「ご、ご、ご、ご、五億!？」

「とんでもない凶悪犯よ。ここへ来たのは彼の跡を探るためでもあったの」

殺人鬼だとは分かっていたが、ここまで酷い者だとは思っていなかった。今すぐにも縁を断ちたい。それでも今の本音を言えば、

記憶は失っているのだから、新たな人生を歩ませてやりたかった。
「あんな所で見つかるとは思って無かったわ。それに記憶喪失とはね……」

彼女は頭を抱えた。

「今回は見逃してあげるわ。でも忠告しておく。ドンドルマの付近でも連れて行けば終わりよ」

カイは、無言で頷いた。辺りに重たい雰囲気がちち込める。

「そうだ、あなたもしばらくここに居るのなら、あたしが特訓してもいいわよ」

「特訓？」

「遠くの地方ではかなり名の知れたハンターなのよ。『紅蓮の騎士』ってあだ名まであるの」

「あだ名？」

馬鹿にされてるのが尊敬されてるのかよく分からない。

「『蒼穹の覇者』って聞いたことある？」

「いや」

「流石にここまでは伝わってないのか。世界は広いねえ……」

頬を突いて遠くを見る目をした。

「そうそう、特訓は明日からよ。あだ名が付くぐらいまで鍛えてあげるわ」

「冗談のつもりだろうが、その目はただならぬ意欲に満ち溢れている。」

「ディアブ羅斯を狩れたのはあなたの實力じゃないの。ボルボ羅斯でどうなるのか見物ね」

確かに、今まで自分ひとりの実力でモンスターを狩った事など一度も無い。ドスジャギイはアヘンの一撃。ディアブ羅斯はもう一方のディアブ羅斯の一撃。クルペッコはアヘンがいてこそ狩れた。

「あたしの名前はペキサ・グレイ。よろしくね」

「ど、どうも……」

い。
カイの本当の狩りは、これから始まるうとしているのかも知れな

紅蓮の騎士（後書き）

ゼロ・クラフトさん、きつとあなたは気付いていると思います。
特に深い意味は無いので、このままスルーするか、問題があればい
つでも言ってください。

再び砂原へと（前書き）

今回もお約束の3000字以内での投稿です（涙クレームがある方は何でも申し付けてください。

再び砂原へと

重傷で動けないアヘンを待つ間は『紅蓮の騎士』こと 그레이 に特訓を受けることとなった。標的は、ボルボロス。

もちろんカイはボルボロスがどんな物かは資料でしか見たことが無い。もちろん詳しい生態も知らない。

「まずは沼やオアシスを当たってみましょ。場所は知ってる？」

「オアシスだけなら……」

クルペッコの跡を辿って一度行った事がある。昨日の記憶を頼りに何とかオアシスに着くが、そこにはケルビー一匹も居なかった。

「ハンターは根気が大事よ。ボルボロスを見つけるまで返さないわよ」

防具越しでは表情は見えないが、声だけでもそれが本気であるとよく分かる。

「二手に分かれて見つけたほうがいいわね。なるべく湿った地面を辿るようにして、ボルボロスを見つけたらこれを使って」

カイは小さな筒を渡された。思ったより重く、側面から糸が出ていた。

「これを使えば仲間に位置を知らせることができる。まずはここを引っ張って……」

しかしカイには何の言葉も耳に入っていなかった。先ほどから言い成りばかりでうんざりしてくる。

「ちよつと、聞いているの!？」

「えっ、あっ、うん」

「私はあなたの命を預かってる身なんだから、迷惑かけないでよね」
それだけを言うと、彼女は砂漠へ開けた道へと出て行った。

『紅蓮の騎士』がどのような戦いをするのかは気になるが、武器が違う以上はしょうがない。

カイは手に持った筒をまじまじと眺める。

「ディアブロスやクルペッコにだって勝てたんだ。一人でモンスターを狩って、実力を見せ付けてやるか」

一人呟くと、手近に会った洞穴に潜り込んだ。洞窟といっても短いトンネルのような物で、暗くもなんとも無いが。

トンネルの出口からはジャギらしき鳴き声がいくつも聞こえる。思わず足がすくんでしまった。

「い、いや、大丈夫……」

ボルボロスを一人で狩る気でいたのにこれでは元も子もない。狭いトンネルの中で太刀を抜き出すと、闇雲に出口へ突っ込んで行った。

「おりゃあああっ！」

予想通りジャギイやジャギイノスの巣窟がそこにあった。不意を突かれた彼らはすぐさま長い刀身で振り払われたが、全く応えていない。

「ガウツ、ガウツ、ガウツ」

雄たけびを上げて飛び込んできたジャギイを軽々とかわし、太刀を振り下ろす。

「ギャウツ！」

一息つく間も無く次々と襲い掛かってくる。

「おりゃあっ！」

しかし、こう数が多いと太刀が振り回しづらい。それに、数が増えていく。

「はあ、はあ、はあ……」

「ギャオオツ！」

「うわっ！」

よろけた体でふらりとかわす。ジャギイが増えるほどスタミナが減りつつあった。

「とりやつ！」

太刀を振り落とすがジャギイに軽々とかわされ、次の瞬間、後ろから意表を突かれた。背中に強烈な足蹴りが飛び、地面に倒れこん

でしまったのだ。起き上がろうとするが掴まれて動けない。ここで死ぬのだろうか。

やはりハンターという物は生半可な物ではないのだと改めて実感する。が、モンスターの牙どころか吐息すら近づく気配が無い。

恐る恐る頭を持ち上げた。

「グ、 그레이さん!？」

足蹴りを食らわせて地面に押さえつけている物は彼女の足だった。 그레이はその場から一步も動かずに、ランスの攻撃範囲に入ったモンスターを突き、なぎ払う。辺りにはジャギイ達の痛々しい遺体が散らばっていく。

「逃げるわよ!」

「えっ」

그레이はランスを軽々と背中にしまいこむと、カイを置いて走り出した。

「ああっ、待って下さいよ!」

カイも必死に後へ続いた。両側を高い岩棚に阻まれ、ただ真っ直ぐに走り続けるしかない。走りながら後ろを振り返ると、そこにジャギイの姿は無かった。

浮き足が立ったカイは、思わずその場に座りこむ。

「し……死ぬかと思った……」

「馬鹿、何でジャギイになんて構うのよ。やっぱり見張ってて良かった……」

気付けば 그레이が来ていた。

「ああいうのは一度構うときりがないんだから……」
 그레이まで息が切れている。カイは、今まで疑問に思っていたことを遂に口に出した。

「あの……、ほんとにプロ?」

「そうでなかったらこんな遠くにまで来てないわよ」

「……………」

「それよりも、標的を見つけたわ」

グレイは谷の出口を指差した。

「えっ……」

カイにとっては、ボルボロスが見つかった事よりもこの短時間で谷を往復してきたことが信じられなかった。

「あなたに任せたらどうなるか分からないし、今回は手本で済ませてあげる」

「いや、やります!」

「実物を見れば気が変わるかもしれないけど……」

そのモンスターは、防具を着ていると言っても過言ではない姿だった。頭から尻尾までが固まった泥に包まれ、それだけの重量を支えている脚力は計り知れない。

「移動する前にこちらから出ないとダメね」

グレイはすでに岩陰からランスを構えていた。盾と共に赤いランスは、先端がヒレのように広がっている。

「まずは相手がどのような動きをしているのかを観察するの。それまで攻撃は控えて」

「は、はいっ……」

目で合図を送りあつた二人は一斉に岩陰から飛び出し、ボルボロスの注意を引いた。硬い皮膚から覗く目は、先にカイを捕らえた。
「グウウウウ……」

グレイには気付かずにカイだけを警戒している。

突然ボルボロスが後ろ足で地面を掘ったかと思うと、巨大な咆哮が砂原に響き渡った。

「ヴァオオオオオオオオオオオッ!!」

ディアブロスとは正反対の、とても低い咆哮。それでもカイの耳には充分応えた。

「ひいひいっ！」

「何やってるの、正気を取り戻して！」

ボルボロスに再び目を戻し、相手の動きを伺う。敵は頭を低く構え、地面をえぐり続けるままカイへと突進を繰り返していた。その威圧感に押し潰されそうになるが、かろうじてそれをかわしきった。体勢を整えたカイは、それでも太刀を抜かずに相手の動きを読み取るうとする。

「『紅蓮の騎士』の教えがどんな物か、この身でしっかり確かめてやるか」

村人たちの期待を背負い、カイは密かな覚悟を決めた。

再び砂原へと（後書き）

一応言つときますが、カイが村に拠点を置くことはありませんっ！

謎（前書き）

最近は感想一覽に何の変化が無いものの、別の小説でやる気をチャージインした蘭土です。

いまだこの小説を読んでくれている方へ、これからもよろしく願います。

謎

妙な胸騒ぎで目が覚めた。自分はなぜかベットで寝ている。起き上がるうとすると、腹に激痛が走った。

「うっ……」

まるで金縛りにあつたかのように体が言うことを聞いてくれない。「そうか、ドスジャギイにやられたんだっとな」

閃光球を投げた直後、距離が甘かったためか一番効果を受けたのは自分だった。その後、ドスジャギイに奇襲をかけられ、激しい動きをしているうちに傷口が開いてしまったのだ。

命運尽きたかと思ったその時、あるハンターが助けしてくれた。全身に真紅の防具を着けた、大剣使い。名も知らない彼は瞬く間にドスジャギイを撃退して、自分に語りかけた。

「まだ君には成さねばならないことがある。それまで殺しはしない……」

不気味に笑うと、自分の顔も見せずに立ち去っていった。

そこから先は、覚えていない。

自分は一体何者なのか？それはカイが知っているのだろうか？

謎（後書き）

さて、何の予定も無いゴールデンウィークを過ごしておりますがゆえに、進み具合が早くなっています。

これなら学校に行った方がマシな気がする・・・。

実践（前書き）

バトルシーンなのに短いぞおっ！？

実践

カイは未だ武器を出さず、ボルボロスの様子を伺っていた。

「ヴァオッ！」

一声あげると頭を低く構えて突進を繰り出すことは、カイの中で分かりきっていた。

その後には大きな隙が生まれることも。

ボルボロスは次にグレイに狙いを定め、岩の塊のような頭を叩きつけようとするが、グレイの盾はその膨大な衝撃を軽々と受け止めた。

「ヴォオオオオ！」

興奮状態になったボルボロスは闇雲に尻尾を振り回し始めた。

しかし、それが二人にとっては又とないチャンスである。

「今よ！」

グレイが合図を送ると共にカイは尻尾を軽々と交わし、ボルボロスに接近する。

安全な腹の下に潜り込むと鞘から飛竜刀を抜き出し、懇親の一撃を加える。

これはボルボロスにダメージを与えるのではなく、体に付着して固まった泥を取り除くためである。

その作戦通り、固まった泥は亀裂を広げて、どうにか崩れ落ちる。

焦らずにボルボロスの下から抜け出すと、もう一度相手の動きを伺い始めた。

その繰り返しで徐々に体の泥は剥がれ落ち、全身が露になってきた。

皮膚は硬そうであるが、これまでの泥と比べたら簡単な物である。

「ヴォオオオオッ！」

ボルボロスは一声あげて例の突進を繰り出す。

しかしカイは面白いように簡単にかわし、隙が生まれたボルボロス

の背中に疾走した。

「うおらあああっ！」

すでに露になっっている背中の皮膚に太刀で切りつけた。
微かにではあるが、血飛沫が飛ぶ。

しかしそれだけの攻撃でボルボロスが怯むことはなく、すぐさま
カイに振り返った。

「来いよ！」

カイは馬鹿にするような態度で手招きをすると、すぐさまボルボロスから離れる。

それに続いてカイを追いかけようとするボルボロスだが、その途中で突然下半身が地面の中へ埋もれた。

それは、カイが気を引いている間に 그레이が設置した落とし穴である。

「ヴォオオオオッ！ヴォオオオオッ！」

退化した前足だけでもがき続けるボルボロスだが、そう簡単には出られない。

二人は構わずボルボロスに接近し、できる限りの力で武器を振るい続ける。

が、その直前でカイが手を止めた。

「えっ、あれって・・・」

그레이のランスの先端からは、攻撃を加えるたびに炎が上がる。
武器の中に麻痺袋や火炎袋を仕込んで属性を与えることができるのはカイも知っていた。

しかし、なぜ自分の飛竜刀にはそれが無いのだろうか？

きっと 그레이と同じように火属性が存在するはずである。

「ちょっと、何突っ立ってんのよ！？」

그레이がランスを突きながらカイに呼びかける。

「あっ」

我に返ったカイは、火竜刀からボルボロスへ再び視線を戻した。
それは、既に落とし穴から出ようとしている。

「ヴオアアアアッ！」

掛け声と共に穴から遂に抜け出したボルボロスは、その強靱な足を再び地面に立たせ、最初とは比べ物にならない咆哮を響かせた。

「ヴオオオオオオオオオオオッ！！！」

「ひいひいひいっ！」

「こらっ、標的から目を離さないで！」

グレイが集中的に浴びせた攻撃は、表皮の鱗をずたずたに切り裂き、血の色に染めていた。

ボルボロスはその後、頭を使って地面を掘り出したかと思うと、地中の中へ全身を隠していく。

彼女はランスを背中に仕舞い、一息ついた。

「こんな狩りは久々ねえ・・・」

そう呟くと、頭の防具を外して瓶の中の回復薬を一口飲み込んだ。

「あの・・・、僕の太刀つて？」

「？」

グレイの顔が不思議そうにこちらを振り向く。

「僕の太刀にはどうして属性がないんですか？」

「誰かの使い古しだからでしょ？」

「えっ・・・」

そうか、そうだったのか・・・。

「その中にある火炎袋はボロボロで、何の意味もないのよ」

まるで透視ができるかのように鞘をじろじろと眺める。

「これはもう一度作り直さないと無理ね」

そっぴい捨てると、グレイはすぐさま走り出した。

「あっ、ちよつと待ってよぉ」

カイも慌てて後を追う。

グレイは、あれだけの装備を着けているにも関わらず足が速い。

二人はペイントボールの微かな匂いを頼りに、砂原の中心を南下していった。

実践（後書き）

砂原の次はどこにしようかな
♪
ワクワク♪ワクワク
♪

土砂竜の猛攻（前書き）

テスト前になっても小説を執筆中の蘭土です。
そろそろ止めないと・・・、母親に怒られるっ！

土砂竜の猛攻

ブナハブラの飛び回る沼地にまでやって来た二人だったが、そこにボルボロスの姿は無かった。

「ボルボロスは沼地で休むんですよ？」

「あまり生態に詳しくは無いから・・・」

グレイはカイの言葉を制すると、手がかりを探るためか、沼の中に足を踏み入れた。グレイはバシャバシャと水飛沫を蹴り上げながら進んでいく。カイはそれを、ただ果然と眺めることしかすることが無い。

「ん？あれって・・・？」

カイは一人呟き、沼の水面に目を凝らした。黒い岩が、沼の水面を移動している。

「いや、ただの木か」

しかしそれは、意思を持っているかのようにグレイへと近づいて行った。

嫌な予感が頭をよぎる。

次の瞬間、グレイの側まで寄った『それ』は、音を立てずに沼の中へ姿を消した。カイの体が、反射的に走り出している。

「危ない！」

沼の中を必死に走ってグレイの元へと急いだ。

「ボルボロスが・・・いる！」

次の瞬間水飛沫が放たれ、ボルボロスの巨大な石頭が、グレイの目の前に迫った。

「ヴォオオオオオッ！」

グレイは驚異的な反射神経で、その衝撃を盾で防ぐ。それでもボルボロスに盾ごと体を押し上げられ、グレイの体は宙へ飛んだ。

「グレイさん!？」

グレイは人形の様に沼の中へ落ちて水飛沫をあげた。

「ヴォアアアアアアアアッ！」

ボルボロスはカイに狙いを定め、突進を繰り出した。これまでに無い速さの突進を避けたカイは、すぐに体勢を立て直してボルボロスへ向き直った。

「 그레이さん！」

いくら呼んでも 그레이は水面から姿を現さない。すぐに助けに行きたかったが、血走ったボルボロスの猛攻をかわすことで精一杯である。

「ヴォオオオオオオオオオン！」

また泥が固まる前に攻撃を加えなければならない。カイは焦る気持ちで、隙ができたボルボロスに急接近する。しかし、その行動は以外にもボルボロス自らが起こした。

胴体を回転させるかのような動きで、体中の泥を大きな塊として分散し始める。側に近づいていたカイは、逃げる間も無くその餌食となった。

「ごふっ!？」

泥はカイの全身に纏わり付き、防具の中にまで入って不快感を味わせた。必死に重たい泥の中から顔を出し、どうにか外の外気を吸えた。

体が重たく、思い通りに動かない。しかも固まってきている。

そして、いつの間にかボルボロスの影が目の前に迫り、その頭は高く持ち上がっていた。

ボルボロスはその頭で、カイを潰す気なのだ。

「ヴォオオオオオッ！」

「うわわわわわわっ！」

重たい泥から四肢を出し、カイは間一髪で避けることができた。

そのまま振り下ろされたボルボロスの頭は、その下にある石を粉々に粉砕している。

「くそおっ！全然落ちない！」

カイはボルボロスが体勢を整える前に泥を振り落とそうとしたが、

容易なことではなかった。

「ぐっ・・・！」

固まりかけた泥にひびが入ったが、その時にはボルボロスがこちらに向き直っていた。

「ヴォオアアアアアアッ！！」

砂原に響き渡る咆哮。

泥で体の自由を奪われたカイは手で耳を押さえることができず、その咆哮は鼓膜に傷を付けるような振動を伝えた。

「ぎゃああああっ！！」

とにかくまずは身の自由を手に入れなければならない。

その時女性の声が、カイの耳鳴りに混じって聞こえてきた。

「そこをどいて！」

「えっ？」

姿は見えないがカイには分かった。

「 그레이さんが生きてる！？」

あれだけの間水面から出て来なかったのに、どうして生きているのだろうか。しかしその瞬間、カイの横を風のように何かが通り過ぎた。それは瞬間にボルボロスに接近し、強烈な一撃を与える。

ボルボロスがその一撃で怯み、 그레이は素早くランスを仕舞うとポーチから球を取り出し、投げた。

次の瞬間、強烈な閃光が辺りを包む。

「ヴォアッ・・・！」

ボルボロスはまともに目を妬かれたのか、興奮した様子で辺りを見回している。その下に 그레이が潜り込み、無防備にさらけ出した腹を突いて突いて突きまくる。

「ヴォオオオオオオオッ！？」

完全に辺りの様子が察知できていないボルボロスは闇雲に尻尾を振り回し始めた。

しかし、 그레이はかがみこんで難なくそれを避け、次の攻撃に繋げる。

その圧倒的な力に、カイはただ啞然としていた。

『紅蓮の騎士』と言うのはただの二つ名では無かったのだ。

重い防具に不釣り合いな素早い動き。

モンスターを圧倒する炎の一撃。

その全てに無駄が無く、ボルボロスとはまらずに地面の中へ巧みに潜り込んでいった。

つまり、逃げたのだ。

「すごい……」

ただその言葉しか出ない。

「何ボケツとしてるのよ。全部あたしに任せるつもり？」

「いや、あまりに凄すぎて……」

「そう？あだ名が付いてるのも悪くないでしょ？」

カイの褒め言葉に、なぜかグレイの態度が一変した。

「『蒼穹の覇者』みたいな伝説級のハンターになるにはまだまだだけどね」

……『蒼穹の覇者』。

そのハンターがどうであるにしろ、カイは一度でも会いたいと思った。

会って、対等に狩りができるようにしたい。

「突っ立ってないで！早くボルボロスの後を追うわよ！」

グレイの一喝が飛んだ。

「ヴォアアアアアッ！！」

ボルボロスが逃げた場所はそう遠くは無かった。

二人が追い詰めたのは沼から少し東へ登った場所で、左を崖、右を

岩棚に挟まれた窮屈で危険な場所。　ボルボロスは相当頭に来てい
るらしく、咆哮を短く済ませるとすぐさまお決まりの突進を繰り出
す。

それを二人は難なくかわしきると、隙ができたボルボロスに一斉に
攻撃を浴びせる。

グレイは右足に、カイは左足に懇親の一撃を浴びせ、ボルボロスは
二人に向き直る前に突然崩れ落ちた。

「ヴォアアアッ！ヴォアアアッ！」

落とし穴に落ちた時のようにもがくボルボロスだが、今回のチャン
スはそう長くないのはカイも悟っていた。

グレイと間隔をあけ、太刀を縦横無尽に斬りつける。

攻撃がリズムに乗り始めたのだが、突然ボルボロスが巨体を持ち上
げて体制を整えた。

「ヴォアアアッ………」

敵がいるにも関わらずボルボロスはその場で息を荒くしているだ
けだった。そこを逃さず、もちろん二人は攻撃を繰り返す。

「カイ君！」

手の抜けない狩りの中、突然グレイがカイに喋りかけた。

「あたしがおとりになる間に、あなたは尻尾を切断して！」

そう言うとグレイはランスを仕舞い、自らボルボロスの前へ出た。

「来なさいよ、素手で相手してあげるから！」

「止めてくださいよ！そんな事出来ないって！」

しかしもう遅く、ボルボロスは挑発に乗ったかのように、目には怒
りの色がこみ上げてくる。

「ヴォアアアアアアアアッ！！！」

「ぐっ……！」

カイはこれまでに無い巨大な咆哮に吹き飛ばされるかのように尻
餅をついた。そしてボルボロスの目の前に居たグレイも、その咆哮
の餌食となっている。

次の瞬間、ボルボロスが回転をし、尻尾を振り回し始めた。カイ

は攻撃範囲に入っていないが、グレイは全くの例外である。

咆哮の威力から立ち直った彼女は、すぐにボルボロスの攻撃に悟って盾を構えた。

火花を飛び散らして何とか耐えるが、体勢が崩れる。

それだけならよかったものの、ボルボロスはもう一回転尻尾を振り回し始めた。

それもグレイは持ちこたえるが、更に体勢が崩れる。

「うつ……」

グレイの呻き声が漏れる。

そして、以外にもボルボロスはもう一回転を繰り出した。次を喰らえばグレイは持ちこたえられないだろう。

そうだ、自分は何をしているんだ？グレイは自分にチャンスを与えるために耐えているのだ。そのことによりやく気づいたカイは、太刀を構えて走り出した。

目の前に迫った高速の尻尾に向けて、それとは逆の方向に太刀を振りかざす。尻尾の膨大な遠心力と、太刀の威力が合わさり、それは会心の一撃となった。

「ヴォオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

口の中で鉄錆の味がした。

「……それは、血だった。」

血が、カイの防具を真紅に染める。

その痛みか、怒りかは分からないが、ボルボロスは最後の叫びを上げ、地面の上に崩れ落ちた。カイは転んだだけだと思ったが、ボルボロスは倒れたまま一向に動く気配を見せない。それどころか、辺りに漂っていたピリピリした殺気が完全に消えたのだ。

「………やった？」

カイにはその確信が持てなかった。切断された尻尾が足元に転がっている。

「カイくん？」

グレイがカイの様子に気づいたのか、心配そうに声をかけてくる。

彼女は、盾を構えていた左手を庇っていた。

「実感が無いんです。僕の一撃でこのモンスターが死んだなんて・・・」

砂原に横たわる岩のような巨体を眺めた。

「確かに人間はちっぽけで弱いけど、人間には助け合う力が在るのよ」

グレイが心を見透かすかのように、そんな事を言い出した。

「どんなに厳しい自然にも、人間が知恵を合わせれば・・・」

そんな事を言っている最中、グレイが突然慌しくなった。

「しまった！早く素材を剥ぎ取らないと使い物にならなくなっちゃう・・・」

ボルボロスの亡骸に近づき、剥ぎ取りナイフで慌しく皮膚や爪などを剥ぎ取っていく。カイもそれに続いて慌てて素材を取り始めた。

太陽が地平線に沈み始め、空は夕焼けに染まっている。

土砂竜の猛攻（後書き）

ちょっと分かりづらいですが、いかがでしたか？
もう一方の執筆中小説、『ゼルダの伝説〜時の迷宮〜』にも感想を
頂けると在り難いです。
では！

謎の影（前書き）

またまた新キャラです。

謎の影

「全く、アイツもどんな所に置いてんだよ・・・」

俺はジョーを内心怨みながら、何も無い砂漠を延々と歩き続けた。あいつに仕事を任せたのが間違いだった。

グループの中でも優秀だった彼にボロミヤ・アヘンの始末を頼み、ロククラックへと向かわせた。

しかし奴は関係の無い子供まで目標にいれる。

更に最悪な事に、奴は二人を甚振って砂漠の中心に置き去りにする。

奴は楽しそうにその結果を報告し、俺の琴線に触れた。

「お前何をしたのか分かってるのか！？そのまま殺せばよかった物を生かしたままにするなんて・・・」

「そんなに焦らないで下さいよ。奴らは砂漠のど真ん中で息絶えますよ」

奴は雄弁を振るっていたが、すぐに彼らが遠くの村の人間に拾われたことが分かった。

最も恐れていたことが、本当に起こってしまったのだ。

彼らが事実を話せば俺達は終わりだ・・・。

それからジョーは二度と姿を見せなくなった。

「・・・やつと見えたか・・・」

遠くくに巨大な岩壁が見える。

あそこがきつと砂原だろう。

砂原の崖の上には最近できたばかりの村があるらしく、彼等が運ばれた場所はそこしか考えられない。

目的はただ一つ。

俺達の存在を知った二人を殺さなければならない。

関係の無い少年には申し訳ないが、これも定めだろう。

謎の影（後書き）

お粗末さまでした（汗

二つの出会い（前書き）

中間テストと、もう一つの小説の執筆でかなり更新が遅れました。
すいませんっ！

二つの出会い

尽きない流星の下、カイとグレイはボロボロの体を引きずるように村への道を辿った。

二人の腕にはボルボロスから剥ぎ取った素材が幾つも抱えられている。

「グレイさん……」

「何？」

「あの……、すいませんでした……」

普段のグレイならボルボロスなど簡単に倒せるだろう。

しかし、自分のような未熟者がいるために行動範囲も限られてしまいうし、何せ向こうは命を預かっているのだ。

もし自分が死ねば、全責任はグレイが負うことになる。

「あたしが近くにいれば心配ないわよ。一度目を離したらジャギイと絡んで死に掛けるなんてね」

グレイは無理をするように笑った。

ボルボロスの不意打ちや、激しい攻撃の防御で体中が痛んでいることだろう。

そんな中、一人の影が暗闇から姿を表した。

「出迎えか？」

「違うわね。ハンターみたいだけど……」

白い防具を身に纏い、ヘルムからはちゃんと若い顔立ちも出ている。そのヘルムから突き出た二本の赤い角も印象的である。

「ちよつと失礼」

その男はそう言うつと腰に手を当て、大きな岩のような物を抱えた。

「ねえ、誰なの？」

「ちよつとそこの人に用があるんで」

男はカイを凝視した。

ハンマーをその手に構えながら。

「人に武器を向けるのは罪よ。今すぐ戻しなさい」

「うるせえなあ。防具が同じだからジョーかと思うと、女かよ」

「ジョー!？」

カイは仰天した。

レウスシリーズで名前がキル・ジョーという名のハンターは彼ぐら
いだ。

ならば、彼の仲間とも考えられる。

「おっ、やっぱり知ってるのか」

男は満足気に笑みを浮かべた。

「すまないが、死んでもらうか」

「待ちなさい!カイ君と何の関係があるの?」

「お前は黙ってろ」

男の顔が、一瞬にして鬼のような表情に変わった。

「その餓鬼は余計なことを知りすぎてる」

何も知らないグレイも、男の殺意を悟っている。

「グレイさん、何も言わないで」

「へっ、分かる餓鬼だな」

カイは男を睨みつけるが、相手は一步も退こうとしない。

それどころか、ハンマーを抱えたまま走り出していた。

「死ねええええ!!」

男は間髪をいれずに岩のようなハンマーを振り下ろす。

カイはあまりの剣幕に、思わず目を瞑る。

次の瞬間、何かがぐしゃりとつぶれる音がした。

そしてどさりと体に重みが押し掛かった。

「……………痛みも何も感じない。」

カイは恐る恐る目を開けた。

体に何か重たい物が押し掛かっている。

「グレイさん!？」

「う……………」

グレイは一瞬の間に自分を庇ってくれたのだ。

ヘルムが大きくへこみ、隙間から血が流れている。

「くそつ、要らない事を・・・」

男はグレイの体を足で押しのけ、またハンマーを構え直した。

「流石のレウスシリーズでも、この威力には耐えられないか」

酔い痴れるように自分のハンマーを眺めている。

ただの茶色い岩の塊だが、相当の威力がある重みを感じ取った。

グレイはぴくりとも動かない。

「僕は誰にも言っていないし、アヘンだって記憶を失っているんだ!」

「記憶を？」

「だからあいつにだけは構うなよ!」

「・・・無理だな」

その言葉が、カイに深く突き刺さった。

アヘンは記憶を失って、新たな人生を築こうとしている。

その邪魔を今は誰にもさせたくないし、過去を思い出されてはこちらも困る。

「悪いが怨むならジョーを怨んでくれ」

「場所を教える!」

「知るか!」

カイの手が勝手に飛竜刀を掴み、抜き出していた。

それを見た男は、楽しい表情を浮かべた。

「ハンター同士で殺りあうってのか？」

カイの耳には何の言葉も入っていない。

「殺す・・・」

「無駄だ!」

カイが振り下ろした飛竜刀を簡単に避け、ハンマーを軽くカイの顔面に打ち付けた。

「ぐあああああつ!」

これだけ軽々とした攻撃に関わらず、カイは鼻が折れそうなほどの痛みを味わった。

鼻血が溢れ出し、口の中にまで鉄の味が広がる。

「そんなボロボロの太刀で俺に刃向かうのは無駄だ！」

「殺・・・す・・・」

早速目の前がふら付き始め、立つのがままならなくなってきた。

「楽しみたい所だがさっさと済ませないといけないんだ」

男はカイに歩み寄り、ハンマーを振り上げた。

その瞬間、男の背後から何かが音も無く歩み寄ってきた。

その気配を感じてか、男は動作を止めて後ろを振り返る。

「誰だ！？」

「うおらああああああ！」

その影は腕に構えた盾を男の頭に思い切り打ち付けた。

あれはおそらく片手剣の盾だろう。

アヘンでは無いのが分かる。

「くそおおつ・・・」

男はふら付いた足取りでハンマーを構えようとするが、動作は圧倒的に片手剣が有利だろう。

ガゴンと鈍い音が響き渡り、男は意識を失って倒れた。

「・・・誰？」

カイは謎のハンターに問いかけた。

「忘れたのか？俺だよ」

相手はヘルムを外して顔の全容をさらけ出した。

そこにあつたのは、いつか会うとは思っていたが、まさかこのような場所で会うとは思わなかった意外な人物だった。

「ヨ・・・ヨウ！？」

「久しぶり！」

こんな状況に関わらずに陽気になれるのはヨウぐらいだろう。

「とにかく、こいつを置いて逃げよう」

「分かった」

カイはまだ息をしていた 그레이 を、ヨウはボルボロスの素材を全部担いだ。

この際、重いなどと言ってられない。

人の命が懸かっているのだ。

カイは喜びと不安が入り混じった、複雑な心境で村への道を急いだ。

「頼む、間に合ってくれ……」

二つの出会い（後書き）

ハンター同士のバトルもかっこいいかな？

交差する決断（前書き）

片方の小説に力を入れすぎて、こちらは軽々しく更新が麻痺状態の蘭土です。

それでも感想をくれる優しい人がいたら、やる気が出るなあ。

交差する決断

レウスヘルムの強度もなかなかのもので、グレイの顔には傷一つ付いていなかった。

その代わり、ヘルムの表面は取り返しが付かないほど原形を失っている。

「何て奴だ……」

ヨウがそのヘルムを手に、隅々まで眺めている。

彼はロツクラックシリーズを身に纏い、武器は片手剣のアサシンガリングという、ハンターにとっては出だしの装備である。

肩周りに布を纏い、簡易なブーツやアームをつけた標準的な防具。

「あんなハンマーは見たこと無いな。余程の威力だよ」

「それくらい分かるよ……」

カイは未だに痛む鼻をさする。

グレイは意識を失ったまま、屋内でベッドに寝かされている。

アヘンは目が覚めているが、まだ休養しなければならぬそうだ。

「その坊主、話があるんだが……」

突然村長が割り言ってきた。

「お前、どうしてロツクラックからここへこれたんだ？すでに封鎖されて嚴重態勢のはずだ」

「ああ、それね」

ヨウはなんとも無かったかのような素振りを見せた。

「人を入れちゃ駄目なのは、もしその人が知らない内にジエン・モーランが連れて来てたらヤバイからだよ」

「なるほど。出るのは逆に歓迎してわけか……」

「そう、ジエンが遠ざかるかもしれないからね。その人は不幸だらうけど」

ジエン・モーラン。

古竜種に分類される、生態や繁殖なども殆ど未知のモンスター。

その大きさは町一つを瞬く間に壊滅に追い込むらしい。

ロックラックから離れて何日経ったかは全く分からないが、もうそろそろ来てもおかしくないかもしれない。

「あれ、待てよ……」

カイの脳裏に嫌な予感がよぎった。

「もしかしてお前、そのモンスターを連れて来たりしてないよな……？」

「えっ？」

その場にいた三人の表情が固まった。

「ま、まさか……。そんなでかいモンスターならとつくに気付いてるよ」

「違う！」

村長が大きな声を上げ、あたりの村人達が一斉にこちらへ振り向いた。

「奴は砂漠の中に潜みながら移動できるし、そんな巨体でも深くに潜られれば音一つ無いはずだ」

「もし付いて来てたら……？」

ヨウが恐る恐る尋ねた。

「すまないが、この村には……」

村長にはいつもの豪快さが消え、俯いている。

あたりに集まった村人からも、ヨウを責める声は無い。

そして、次の瞬間……。

「ゴオオオオオオオオ……」

砂漠の方面から何か聞こえてくる。

辺りにいた人々は一斉にそちら側の崖に走りより、我先にと身を乗り出した。

「な、何だあれは！？」

「山が動いてんのか？」

カイとヨウも村人を押し分け、それを見ようと身を乗り出した。
「オオオオオオオオ……」

「何だあれは!？」

「生き物か!？」

カイとヨウの声が重なる。

砂漠のはるか向こうに見えたのは、巨大な『何か』だった。

かなり遠くにあるため、更には暗くて見えづらい為にどのような形かは分からないが、月明かりが、確かに巨大なシルエットを映し出していた。

それは、紛れも無く動いている、生き物だった。

まるで山脈が蠢いたかと思うと、それが瞬く間に持ち上がる。

あまりの大きさに遠近感が狂いそうになった。

村人も皆言葉を失っている。

ただ、カイの中では一つの決心が固まっていた。

「ヨウ、この村から出よう」

「まさか、お前もか？」

「もちろんだろ」

一刻も早くこの村から出て、誰にも迷惑が掛からないようにしなければならぬ。

どこか遠くへ、なるべく早くに……。

しかし、村長の口から出た言葉は以外だった。

「よし、一晩休んでから行って来い」

「何言ってるんですか!？」

そんなことになれば、ますます危険は強まるばかりだ。

こんな事になっても自分達を責めない村人にも、頭を下げるだけではすまない。

「そんな体で出て行くのは危険すぎる。それにモンスターが来ても、誰も死ななければ問題ない」

「そんな問題じゃないでしょう!」

一刻を争う自体を、本当に理解しているのか不思議にすら感じる。

カイは今すぐにでも走り出そうとしていた。

「行かせんぞ!」

その瞬間、カイの顔面に村長の拳がのめり込んだ。

「うっ……」

カイは一瞬のうちに意識を失い、力なく村長の腕の中に倒れこんだ。

「すまないが、こんな体で行かせるのは難しい。明日準備を整えるんだ」

「本当にすみません……」

「大丈夫だ」

村長はそう言つと、カイを担ぎ上げてグレイの居る小屋の中へ入つていった。

村人たちも何事も無かつたかのように各自の仕事や家に戻る。

村の中心に、ヨウはただポツリと立っていた。

「大変そうだな」

「えっ？」

背後からの聞きなれない声に振り向くと、ジャギイの装備に身を包んだ少年が立っている。

自分と同じ程の歳らしく、その目には一欠けらの表情も見えない。

「誰？」

「カイの連れだよ。お前は？」

「ヨウって言うんだ。よろしく」

「俺はアヘンだ」

カイにこんな友達がいるのは以外だった。そんな気がするほど、彼の顔はかなり暗い。

「知り合いか？」

「う……うん」

「……………」

「……………」

なんだか話が弾まず、お互い言葉が出ない。

「俺の事知ってるか？」

「へ？」

どういうことだろうか。

彼は有名人でもあるのか？

ただ、この顔には見覚えがあった。

ロックラックを出て行くとき、この顔そっくりのポスターを見た覚えがある。

ヨウはその内容を、懸命に思い出そうとした。

ボ……ボロミヤ・アヘン

十六歳にしての殺人鬼

「まさか……あるわけ無いよな……」

そんな人間がここへ来るのは馬鹿馬鹿しいし、カイとも仲がいいのであればそんなことはありえない。

今日は疲れていると感じ、ジエン・モーランのことを気にしながらも寢床へ向かった。

交差する決断（後書き）

今回の内容は微妙ですね（今更ながら）。

登場人物紹介（１）（前書き）

そろそろキャラクターとかの構成が分かり辛くなってきたので、
ここで整理をつけましょう（飛ばしても可）。

ちなみに矛盾している点が一つありますが、気にしないで下さい。

登場人物紹介（1）

レイル・カイ

15歳

防具 ハンターシリーズ

武器 飛竜刀

本作の主人公。

様々な出会いや狩りを通し、ハンターとしての飛躍的な成長を成し続ける。

ボロミヤ・アヘン

16歳

防具 ジャギイシリーズ

武器 ヘビィボウガン

記憶を失った16歳にしての殺人鬼。

彼の素性を知っているカイ達に守られながら、自分は何者かを探求している謎を秘めた存在。

ドリスタ・ヨウ

15歳

防具 ロックラックシリーズ

武器 アサシンガリング

カイとは幼い頃から親しく、頼られる知恵袋的存在。

ただ、ミスをしてしまうことも多々ある。

ペキサ・グレイ

23歳

防具 レウスシリーズ（損傷で使用不可能）

武器 スパイラルヒート

『グレンの騎士』との二つ名を持つ、砂原の村にドンドルマから派遣された凄腕女ハンター。

彼女もアヘンの素性を知っており、彼の真実を密かに追いつめていく。

キル・ジョー

？歳

防具 レウスシリーズ

武器 ？

執拗にカイ達を付け狙う極悪ハンター。

アヘンとは何らかの関係があるらしいが……。

登場人物紹介（１）（後書き）

もちろん話はまだまだ続きます。

砂原を後にするカイ達に待ち受ける試練とは！？

命を懸けて（前書き）

もゝ最近、文章がグダグダです！
誰か厳しい指摘を下さい！

命を懸けて

カイが目を覚めたのは明け方、つまり夜通しぐっすり眠っていたことになる。

最初は意識が朦朧としていたが、視界が安定し、足を床に下ろし、何があつたかを思い出そうとする。

そんな時、突然ヨウが扉を開けて入ってきた。

「カイ、早くここから出よう」

「へ・・・？」

最初は何のことも全く分からなかった。

しかし意識が安定していくにつれ、昨日の出来事を鮮明に思い出す。

「やばい！」

カイは誰かが纏めてくれたらしい荷物をほったらかして、外へ飛び出した。

今は一刻も早くこの村を出て、危害を押さえなければならない。

村は想像以上に慌しく、皆が荷を纏めて待機している。

「何で寝たんだよ俺・・・」

実際は村長が力づくで寝かし付けただけなのだが、どうしても自分を責めてしまう。

カイが向かった先は、砂漠方面の崖に寄り添っている村長の元だった。

「古竜はどうしてるんですか！？」

カイは真っ先にその事を聞く。

古竜とは他にもない、ジエン・モーランのことだ。

「あいつも本気ではないと思っていたが、思ったより早く来ている」

「あの・・・」

カイは村長から離れ、深く頭を下げた。

「有難うございましたっ！」

「何言ってるんだ。まだ用がある」

「こんな時にですか!？」

村長はあつけに取られるカイの目の前に、何かの包みを差し出した。

「村の皆からの贈り物だ。大事にしろよ」

「えっ!？」

ふと、村の皆から視線を受けていることにカイは気付いた。その目は軽蔑の目つきではない。

こんな時になつても、カイの無事を考えている。

それだけで涙が出てきた。

差し出された包みを地面に置き、縄を解いていく。

「・・・・・・・・これは？」

ずっしりと重い岩のような肌触り。

手に持つて広げてみると、それが防具であることが分かった。

滑らかに加工された頑丈な表面、肩から突き出た無数の突起。

これが何の防具であるかはすぐに分かる。

「ボルボロスの防具ですか？」

「皆が分担して、あつという間に作れたぜ。もちろん素材も蓄えが在ったしな・・・」

カイは喜びで胸がいっぱいだった。

しかし、今はそんな事に陶醉している場合ではない。

「では、すぐに出て行きます!」

「頼んだぞ!」

「アヘン君、君はここに居るしかないわよ」

「何でだよ?こんな傷ぐらい・・・・・・・・」

「そういう問題じゃないのよ！」

「……」

「無茶をすればまた傷が開くし、あなたは関係ないんだからじっとしときなさい」

「あの二人は一体何を……？」

先ほどの村の様子や、突然現れたヨウと名乗る少年など、アヘンも不安を隠せない様子だった。

しかし今、彼の心は不安定な状態になっている。

無茶をさせれば記憶や傷に関する問題も出てくるだろう。

「大丈夫よ。二人きりで狩りに出るだけで、村の皆が心配してるのよ」

これが精一杯の嘘だった。

「それに……」

グレイはそのまま言葉を続ける。

「あなたも充分鍛える必要があるしね」

「無茶をするなって言ってたじゃないですか」
しまった。

グレイが言い放つ矛盾を、アヘンはすかさず指摘した。

「え……あつ、まあジャギイぐらいのモンスターを狩るだけだから」

納得がいかない様子のアヘンを置き、グレイはそそくさと外へ出た。

もちろん彼女もあの二人の目的は知っている。

古竜、ジエン・モーランのおとりになり、この村を救う。

あのカイという少年は、底知れぬ勇氣と、才能を持ち合わせている。いつかは英雄とも呼ばれるだろう。

・
・
・
・
もし、生きていねば。

命を懸けて（後書き）

内容、分かってくれたかな？
自分でも分からない・・・。

砂漠に潜む脅威（前書き）

最近テストも多く、受験生という肩身が狭い立場でもあるのでこれからも更新が遅れると思います・・・・。

砂漠に潜む脅威

灼熱地獄の中で、この重くて暑苦しい防具、ボロスシリーズを身につけるのは予想以上に困難だった。

防具の中に熱気がこもり、汗が全身から噴出して体に纏まりつくのが酷く動きづらく、そして何よりも不快その上なく、ヨウの涼しげなロッキラックスーツが羨ましい。

だがそんなことに気をとられる訳にもいかず、カイはその考えを振り切って砂漠を眺め渡した。

360度全く同じ光景で、あの巨大なモンスターが身を潜めているとは信じがたい。

だが、居るのだ。この広大な砂の海の中に身を潜め、ゆっくりと、そして驚異的な破壊力で、街一つをも簡単に壊滅できる巨大な『生物』が。

「よし、ここにしよう」

カイはそう言うと、他と比べるとまだ高い砂丘の上で突然足を止めた。そして、腰に結わえ付けていた角笛を取り出す。

角笛とはモンスターの角を加工して作った、大きな轟音を響かせる道具である。単品では相手モンスターの怒りを買うばかりで意味が無いが、カイはそのつもりで持って来ていた。もちろんヨウも同じ物を持っている。

「せーのっ……っ」

カイの掛け声と共に、二人は角笛を思い切り吹き鳴らした。

『ブオオオオオオオオン………ブオオオオオオオオオン………』

けたたましい轟音が砂漠に響き渡り、辺りの陽炎も吹き飛ぶような勢いで音の振動が砂漠に伝わっていく。

これほどの勢いなら、砂の中に潜む巨大な古竜も気づかないはずが無い。

「よし、古竜が来る前にもう一度移動するぞ！」

「本当に人間の足で逃げ切れるのか!？」

「確かに相手は巨大だ。でもその分動きは鈍いと思う」

もちろんこの言葉は勝手な推測だった。しかしあの村のため、そして、ロックラックのためにもジエン・モーランを遠ざけなければならないのだ。

カイはいつの間にかこれほど成長したのか、自分には計り知れないこの短い間に、クルペッコやボルボロスまでも制するともなれば革新的な進歩だろう。

だがそんなことを考えている暇は無い。今ここに、あの巨大なモンスターが潜んでいるかもしれないのだ。自分が犯した罪は自分でどうにかしなければならぬ。

「はぁ……はぁ……疲れた……」

「こんなところでバテたら怪物の餌食だぞ!しっかりしろ！」

しばらく走り、立ち止まり、角笛を吹き鳴らし、また走り、止まり、吹くの繰り返しが続いた。流星の古竜にでも反感を買われることは間違いない。

どれほどの距離を移動したのか、考えるだけでも目が眩みそうになる。

ヨウは立ち少し立ち止まって、生温くなった水を一口のみ、また走り出そうとしたが、耳の中に聞きなれない音が入った。

「ゴオオオオオオオオ……!」

あまり上手くは聞き取れなかったが、何かの鳴き声らしきもののようだ。

「カイ、何か聞こえたぞ!」

ヨウは先に行くカイを呼び止めて、もう一度砂漠を眺め渡した。

「何か聞こえたのか?」

「たぶん、俺達に気付いてくれてるんだと思う」

しかも、遠くの砂の表面が異常に膨らみ始めている。まさかあれがモンスターの大きさだと言うのだろうか。

ヨウがしばらくその動きに見とれていると、カイに無理矢理腕を引かれた。

「まずい!来てるぞ!」

「あ、あれがモンスターなのか!?!」

もちろんカイも異常な大きさに驚いているはずだ。まだ自分達にとってはリスクが大きすぎるのではないだろうか。

とにかく、今、新たなことが分かった。

相手は、巨大だ。

巨大すぎるくらい巨大だ。

二人は背後に潜む巨大なモンスターから逃げるため、砂漠の上を

風のように疾走した。

「まさかあんな大きさとは思っていなかったよ！」

「あれが来たら死ぬぞっ！」

そう、二人の目当てだったモンスターは、予想をはるかに超えて巨大だ。

まだ全形は表せていないが、あの砂の盛り上がり方は尋常ではない。それに、あの盛り上がりの中から何らかの鳴き声が聞こえるということは、明らかに生物がいることを示している。

そんな中、カイが突然足を止めた。ヨウもそれに続いて立ち止まるが、気持ちが完全に高ぶっている様子だ。

「ヨウ、ここから二手に分かれよう。お互い離れた場所から角笛を吹けば、古竜も戸惑うかもしれない」

「任せろっ！」

そう言葉を交わすと、お互いはそこから全く逆方向に走り始めた。

ジエン・モーランの進行方向と垂直になるようにだ。

だが、相手が戸惑っているかなど知る事も出来ない。全ては経験に任せるしかなかった。

.....ゴゴゴゴゴゴゴゴ.....

「なっ、何だっ!？」

.....足元がゆれている。

いや、足元ではない。空気が音の振動でけたたましく揺れて、足元の砂が揺れているかのように感じるのだ。

——古竜はこちらへ来ている。いや、ヨウの方が？

「ゴオオオオオオオオオッ!！」

後ろを振り向くと、100m程離れた場所が、アリジゴクの巣のようになみが出てくる。しかも、やはり巨大だ。

「こつちかつ！」

相手はこちらを敵とみなしている。

逃げるのだ。逃げて逃げて、犠牲を抑えなければならないのだ。だが相手は嘲笑うかのように巨大だ。移動も予想以上に早い。だからと言って、立ち向かつて無駄なのはこれだけを見ても明らかだ。だが、走っても走っても遠ざかる気がしない。

無駄だったのだ。こんなちっぽけな人間が、こんな巨大な存在を動かすことなど……。

カイは、走るのを止めた。

「もう……無理か」

カイは一人でポツリと呟くと、背後を振り向いた。

そして、その振り向きざまに飛竜刀を抜き出し、構えた。

こんな行動を起こすことが、自分でも以外だった。こんな巨大な怪物と戦って、どこに勝ち目がある？

なのに、体が勝手に走り出していた。一歩一歩砂を踏み出すたびに、ゆっくりと、じわじわと、巨大な窪みが迫っている。

——俺は、ここに飛び込んでどうする気だ？

自分に問いかけても、答えは出ない。

恐怖も感じない。

「グゴオオオオオオオオオオオオオオ！」

窪みの中心から塔が出てきた途端、カイの足が止まった。

違う、塔じゃない。角か……？いや、牙だ。しかも桁外れな大きさの。

根を張っているかのような巨大な牙が全て露になると、そのまま勢いに乗るように、体も飛び出してきた。

まるで絶壁のような体が前方の視界を切り裂き、胸ヒレのような分厚い突起も、そのまま垂直に飛び出す。

「うわわわわわわわっ！」

先ほどの気力も捨てて、カイは砂煙に押されるように逆方向へ逃

げ出した。

そして、先ほど自分が走り出した理由も、微かに分かる気がした。きっと相手が姿を現さないあまりに、恐怖感も消え去っていたのだろう。

だが今は違う。自分は本物を遂に見たのだ。塔のような牙に、断崖絶壁のような巨大な岩肌を。

そして、カイの頭上を、何かが飛んだ。日光が遮られ、辺りが一気に暗くなる。

「……う、上っ!？」

ジエン・モーランはカイの遙か頭上を、跳躍していた。尾ビレの形もはつきりと見て取れる。

しかし、ジエン・モーランに翼など付いているわけがない。あの巨大な体を持ち上げているのは、あの中に秘められた、古竜の測り知れない力なのだ。

そんなことを考えている間に、『それ』は再び砂の中へ、爆発のような轟音を響かせて吸い込まれるように潜っていった。

どちらへ逃げたらいいのか判断が付かない。相手は地中と空を自在に動き回って簡単に先回りが出て来る。

「今度はどっちから来る気だ!？」

カイは砂煙の中、見える範囲を必死に警戒した。だが、地表は何も変わっていない。

いや、おかしい。辺りの風景が上がって見えるのは気のせいだろうか？

「……違う、自分が下がっている! 巨大の窪みの中に、今にも取り込まれかけていたのだ。」

「うわああああああっ!」

このままだと、アヘンがディアブロスの角に突き上げられた時の場合では済まされない。

いくら走っても砂を踏むばかりで、全く上へ上がれない。もうじきあの巨大な牙が足元から飛び出し、跡形もなく碎かれてしまう……

！

そして、その時が来た。

「グオオオオオオオオオオッ！！」

「ずいぶん走ったな……」

ヨウはカイと全く逆方向に走り、かなりの差を開くことが出来た。角笛を構えて、一気に吹き鳴らす。

……ブオオオオオオン………

よく通る低い音が、砂漠中に鳴り渡った。おそらくカイもこうしているのだろう。と思いたいのだが、向こうの角笛の音は全く聞こえず、他に何かあるかと言えば、ずっと向こうで砂煙が渦巻いているぐらいの事だ。

「カイ……生きてくれよ」

そう呟き、砂の上にどっかりと腰を下ろした。

「……ん？」

空気が振動して、地中の中から音が伝わってくる。耳を当ててみると、ただの地震とは違う。嫌な予感が頭をよぎった。

「来るのか？ここに」

問いかけても答えなど帰ってくるわけがない。更によく目を凝らしてみると、遠くのほうに目立った窪みが見える。

「ゴオオオオオオッ………」

「くそっ、ここに着たのかよ！」

とは言いつつ、カイの方へ行っていないことが分かって心底安心し

ていた。こちらへ来たと分かれば後は走って逃げるのみ……
なのだが、

「はっ、速い!？」

窪みの中から巨大な突起が突き出し、巨大な絶壁が現れ……、
そして、その一部に人影が見えた。

砂漠に潜む脅威（後書き）

余談ですが、サッカーワールドカップ、日本負けちゃいましたね・・。
。

でも挫けるな！チャンスはまだある！

砂漠に別れを告げる時（前書き）

文章力が更に落ちた蘭土です。しばらくの間更新が出来なくて
いませんでした・・・。

暇な方だけ見ていってください。

砂漠に別れを告げる時

「グオオオオオツ………」

突如として現れた巨大な怪物は、ヨウにその巨体を見せ付けるようにしてすぐさま砂の中へ姿を消そうとした。広大とも言うべき巨大な岩肌を大らかに捻らせながら巧みに砂を押し分け、体が、そして尾びれも見る見るうちに跡形をなくした。

それよりも気になるのは、怪物が潜った後の砂の上にポツリと倒れた人影である。

「ひ……人？」

嫌な予感を抑えながら慎重に走りより、茶色い防具——ボロスシリーズを付けた人を確認できた。この防具を付けた人物で心当たりがあるのは一人だけである。

「カイっ！」

体が反射的に走り出していた。彼は死んでしまったのだろうか。体が冷たくなっていて、自分は、今までのかけがえのない友を失ってしまったのだろうか……。

すぐ側まで走りよって、重たい体を抱え上げた。ヘルムのガードを上へ上げてみると、やはりカイである。意識は感じられない。

「おいっ、しっかりしろ！生きてるか？」

必死に重たい体を揺さぶると、突然カイの口が、微かに動いた。

「……大……丈夫……」

「！？」

ヨウは幽霊でも見たような形相で、カイを手放して後ずさった。それもそのはず、あの巨体に捕まりながら砂の中で息が出来るなど無理に等しく、今なら窒息死してもおかしくない状態なのだ。しかしカイは、自力で立ち上がるうとまでしている。

「ヨウ、大丈夫か？」

「それはお前の方だろ！」

しかし、巨大な影はすぐそこに迫っている。

ヨウも希望が見えてきたのか、彼の足が自然と速まっていくなのが分かった。自分でも流石に追いつけない。

それよりも、ジエン・モーランはどこから襲ってくるのだろうか。先ほど宙を舞っているのをちらりと見たが、いつの間にかその陰は音もなく消えている。胸騒ぎがした。

「止まれ！」

先を走っているヨウを呼び止め、自分も立ち止まった。

「何でこんなときに止まるんだよ、このまま全速力で行けば逃げられるぞ」

「馬鹿、自分の体力も考えてみる」

ヨウは無我夢中で走っていたので気にも留めていないようだが、彼の体力は限界まで来ている。全身から汗が滴り落ちて、水分の補給もほとんどしていない。もちろんカイも同じだった。肩を上下させて息を荒くし、目の前がふらつく。この炎天下の中でこれほど走り続けられるヨウにはいろいろな意味で感心させられる。確か彼は小さい頃から走り回るのが大好きで、鬼ごっこでは無敵だった記憶がある。

クーラードリンクを何口も飲んで、体に清涼感を行き渡らせる。体に纏まり付いた汗がスーッと引き、頭の回転も早くなった気がした。ただ、防具の中に残った大量の砂が不快でならない。

ジエン・モーランに襲われた時、カイは反射的に、いや、運のおかげであの図太い牙に当たらずに済んだ。そして次は凹凸の激しい体の表皮が現れ、流石にかわしきれない、危機的な状況に陥った。

しかし死ななかった。気が付くと、自分はジエン・モーランの固くて大きく突き出た凸に引っかかり、砂の中をさまよっていたのだ。もちろん、砂に流されていれば自分は完全に死んでいた。おそらく生き埋めだろう。本当に生死の境をさまよう気分で、身を任せるしかなかった。しかし気が付くと、自分はヨウに抱えられていたのだ。まぶしい太陽、湿気のない熱気が、地上だということを教えてくれたのだが、自分が死んでいないことに違和感を感じた。今でも夢の中にいる気分だ。

「ヨウ……ありがとう」

ぼそぼそと、思わず独り言を呟いてしまった。

「何か言った？」

「……え？ いや、なっ、何も。気を抜くなよ」

「安心しろよ。俺は平気だから」

こんな時でも場を和ませてくれるヨウには感謝しよう。そして、アヘンやグレイさんのためにも、生き延びなければならぬ。

「これで逃げ切るぞ」

カイは独り言のように呟くと、前方の砂に目を凝らした。大きな窪みが出来ている。つまり、ジエン・モーランが先回りをして待ち構えようとしていたのだ。あのまま呼び止めなければ、餌食になっていたのかもしれない。

カイは窪みの動きに目を凝らし、相手の出方を読み取ろうとした。

「俺が合図したら一気に突っ切るぞ……」

「あ、合図？」

ヨウは半信半疑で頷いた様子だ。確かに今までの推測は全て外れ、相手の動きの全てが予想を上回るものばかりだったのだから。

「これで最後だから……頼む、信じてくれ」

ヨウは、無言で頷いた。

窪みの中心に動きが見え始めた。一箇所の砂が盛り上がり、徐々に、相手の出てくる場所が特定されてくる。

——相手は攻撃を仕掛けてくるのだろうか、だとし

たらののめいじ？

牙を向けるか？それともあの速さなら……。

次の瞬間、カイの中で、何かがピタリとはまり込んだ。

グオオオオオオオオオオオツ・・・

「ヨウは右回りであの裂け目に逃げ込め！ 今だ！」

「絶対無事でいろよ！」

ヨウは走り出した。カイも走り出した。

そして、ジエン・モーランが、縄張りの侵入者への最後の裁きを下した。

ドオオオオオオオオン！！

砂が吹き荒れた。砂とは思えない衝撃を腕でかばい、走る。視覚も聴覚も役に立たない……。

「ゴオオオオオッ！！」

辺りが暗くなった。上を見上げると、巨大な岩石——ジ
エン・モーランの腹が、こちらへ向かっている……！

「うおおおらあああつっ！」

走って、走って、走り続けた。巨体が自分を潰そうと、重力に従うままに落ちてくる。あまりの大きさに、落ちてくるのが遅くすら見える。しかし、時間はない。この一瞬で、一歩でも多く進まなければ逃げ切れない。

次の瞬間 巨大な腹は砂漠の表面に叩きつけられた。カイは間一髪、髪をダイビングで直撃を免れたが、辺りの砂もえぐられるような突風に派手に飛ばされた。

「ぐあああつ！」

体が地面に叩きつけられ、全身が一瞬麻痺した。それでも体を奮
い立たせ、懇親の力で両足を地面に立たせた。走らなければならな

い。

「ぐっ……！」

右膝に激痛が走る。地面に叩きつけられた衝撃のせいだろう。だがそんなことに構ってはいられない。多少引きずるような形で、全く勢いの失せない砂嵐を進んだ。

「グオオオオオオオオオオッ！！」

鳴き声が近い。すぐそこにいる……。

「カイ、大丈夫か！？」

ヨウの声が聞こえる。

「こつちに来るな、危ないぞ！」

必死の警告も耳に届いていないかのように走りよってくる。だが内心では嬉しかった。こうやって自分を思いやってくれる仲間の暖かさが……。

しかしカイの考えはすぐに正氣に戻った。ヨウの背後が変だ。砂が盛り上がっている。

「逃げろー！ーっ！」

ヨウに向かって走り出さした。そして手にはなぜか飛竜刀が構えられてある。またあの時と同じだ。

走ってくるヨウを横に突き飛ばし、目の前に表れた巨大な影に向かって、太刀を振り下ろした。

「くらええええええええええっっ！」

こんな太刀でダメージを与えられるはずがない。だが後悔しても遅かった。左右はすでに二本の牙に挟まれ、横になど動けない。

そして牙の付け根が現れ、本体の顔も同時に、巨大な口をあけて砂の中から飛び出してきた。それと同じタイミングで、太刀が巨大な岩のような顔面にクリーンヒットした。

そしてどうなったのか、分からない。砂嵐が急に吹き荒れ、視界が完全に塞がれた。

「っ！？」

そこからカイは、意識を失った。

「しっかりしろ、生きてるか？」

「……………ん？」

俺は、生きてる？

「天国？」

「馬鹿、見事に逃げ切ったんだよ。お前のおかげで」

痛む上半身を自分で起こして、辺りの様子を伺った。両側が高い岩棚に挟まれ、谷の中にいるようだ。

「どうして逃げ切れたんだ？」

「よく分からないな。ただ、お前が飛竜刀を使ったのは明らかだ」
「太刀を？」

確かにそれは覚えてる。しかし、そこから先の記憶が思い出せない。側に転がっている、鞘に収められた飛竜刀に手をかざしてみた。まるで火のような熱さが防具越しでも伝わってくる。

「熱を持ってる！？」

ありえないことだった。父から譲り受けたボロボロの飛竜刀は、中身の火炎袋も使い物にならなくなり、また炎を吹き返すようになるには加工しなければならぬはずだ。しかも桁違いに熱い。

「立てるか？ここにいてもまだ危険だ。話は後でゆっくりやろう」

焼けるように熱い、鞘に収められた太刀を背中に担ぎ、カイは自力で立ち上がった。

ここから先は砂漠とは逆の方向に進んでいかなければならない。ジエン・モーランを誘き寄せる作戦は成功しても、また戻れば一からやり直しになるかもしれないのだ。

「アヘン達は無事かな」

「お前があれだけ頑張ったんだ。誰も悔いは残さないよ」

二人は何の躊躇もなく、全く知らない未開の地に向かって進み始めた……。

砂漠に別れを告げる時（後書き）

砂漠編は終わりです！次の舞台は何なのか、皆さん更新を待っていてください！

その頃（前書き）

三点リーダーの正しい使い方を覚えた蘭土です。稚拙すぎる文で申し訳ありませんが、とりあえず僕なりに努力しました。誰か厳しい指摘を下さい……。

その頃

グレイと村長の率いる数少ない村人達は、避難のため、ほぼ暗闇の洞窟の中で身を寄せ合っていた。どれほどこうして危険が過ぎるのを待つのだろうか。

「皆、大丈夫？」

「大丈夫だ、まだ誰も倒れてないよ。慣れてるからな」

村長は余裕の表情で、後ろの人間の群れを監視した。村人達の余力は確かにあるようだ。

「それにしてもグレイさんよ、どうして防具を変えたんだ？」

「まあ、ちよつとした弾みでね。元から軟弱なレウスシリーズでしたので」

そう言うところグレイは俯き、誰にもばれぬように深いため息を一つついた。体にはあらかじめ持ってきていたレイアシリーズが装備されている。

レウスシリーズが壊れたのは、本当はあの男のせいだ。こんな暑い地方でベリオシリーズを身に着けたハンマー使い。あれは誰だったのだろう。

そして今日の朝、カイとヨウは、ジエン・モーランを移動させるために、一大作戦を決行した。だが『一大作戦』などといっても、最初はそんなつもりはなかった。外見を確かめただけで古竜の性質を見極めるなど、なんと愚かな事をしてしまったのだろう。胸の中に罪悪感が広がる。

「カイ君…大丈夫かしら」

最初は地響きが鳴り渡ったり、砂嵐が襲ったりなどで、村人達は恐怖のあまり身を寄せ合ってほとんど動いてくれなかった。

だがしかし、今ではすっかり元に戻り、焼けるような日の光が洞窟の中に差し込んできている。それでも洞窟内の気温は外に比べると格段に低い。

「アヘン君、起きてる？」

グレイは側で悠々と昼寝をしているアヘンに声をかけた。だが彼は粗末な毛布に包まっていたまま、ピクリとも動かない。何やら胸騒ぎがした。毛布を掴み、無理矢理はがしてみた。

「あっ……」

アヘンは居なかった。代わりにあったのは、人間が寝ているような形を作った藁だった。一体いつの間に……。

しかし彼が黙っていられないのは予想済みだった。ずっと側で見張っていたつもりだったのに、こんな巧みな神業で逃げられるとはなかなかの腕だ。ヘビィボウガンやジャギシリーズの防具も消えている。

そして、また一つの驚きが現れた。

「大変だっ！モンスターが入ってきた！」

村人の群衆から叫び声が上がった。洞窟の壁の隙間から、大きな刺々しいヒレが侵入してきたのだ。

「デルクスだわ、全員離れて！」

デルクスとは、砂漠地方にしか生息しない砂の中を住処にするモンスターだ。大人よりも大きく、砂の中から群れで襲われるならば素人ならひとまりも無い、ある意味危険なモンスターだ。

グレイは、大勢の人間に戸惑う様子でその場を泳ぎ回るデルクスに接近し、スパイラルヒートを取り出した。これだけ周りに人が居ると、かなり動きにくい。

「はあっ！」

顔を覗かせたデルクスに一突きを浴びせる。ランスの先端から高温の炎が放たれ、その一撃にたまりかねたデルクスは砂の中から全身を露にした。身動きの取れないそのデルクスは砂の上で、釣り上げられた魚のように跳ねている。

「クルルルッ！」

背後からまた一頭が迫ってくるのを感じた。とっさに盾で受け止め、砂の上に滑り落ちたデルクスを串刺しにした。

それを見かねてか、他の群れの仲間達は元の場所から逃げ出して行った。グレイはそれを追いかけることも無く、自分が殺したデルクスを洞窟の外に放り出している。他の村人達は今の早業に呆氣にとられていた。

—— 最近姿を見せなかったデルクスが戻ってきたということは、ここに大きな敵が居ないからではないのか……？

グレイは手を止め、洞窟の奥でうずくまる村人達にこう告げた。
「皆さん、ここはもう安全です。デルクスがここへ戻ってきたという事は、ジエン・モーランがどこか遠くへ行ったに違いありません」
—— きっと、アヘンも大丈夫だろう。そしてカイも。

その頃（後書き）

ああ、もう意味分からん（涙

水没林（前書き）

今回は少しほのぼのした雰囲気です。なぜかこっち系の文章はスラスラと進み、一日で二話連続投稿ができました。こっちのほうに向いてるんですかねえ……（シヨック

水没林

カイは空になった水筒を覗いたり逆さまにして振ったりして、最後の一滴も飲み干してしまった。

おそらく半日は歩いただろう。予め持ってきていた食料や水も今尽きた。

「……こりやあまずいぞ。今から戻ろうとしても取り返しが付かない」

そう言つて、カイはヨウへ振り返つた。屈みこんで雑草を口に入れようとしている。

「おいっ、食べられるわけないだろ！」

ヨウの頭を叩き、彼が手に持っていた雑草を取り上げた。こんなことで腹痛になつてしまつては困る。

「止めてくれよお、噛むだけで空腹を紛らわそうと思つたのに」

「もっと自分の持ち物を管理できるようになれよ。俺のだってちようど今無くなつたんだ」

喋ると喉が渴いてきたので黙つた。ヨウも黙る。

それよりも、この谷間はどこまで続くのだろうか。いくら進んでも空を掴むように無駄な気がする。だが変化は現れていた。今ヨウが食べようとしていた雑草も、徐々に目に付くようになってきている。空気も湿つぽくなって、喉の渴きも自然と潤ってくる。

そんな中、突然視界がぶれた。

「痛っ！」

どうやら何かに躓いてしまったようだ。足元を見ると、地面から突き出た木の根がある。

「大丈夫か？なんだか心配だな」

「お前が言つなよ……」

立ち上がつて、防具に付いた土を払つた。

「さてよ、何の音だ？」

ヨウがポツリと呟いた。

「え、音？」

ヨウはカイの先を足早に進み、しばらくするとカイにも音が分かるようになってきた。チヨロチヨロと、少量の水が流れ落ちるような音だ。というより、本当に水だった。岩の裂け目から溢れる少量の水が、小さな滝となって流れ落ちていたのだ。しかも中々の透明度である。カイはすかさず水筒の蓋を開け、その天然水を入れようとした。ヨウも全く同じ動作をして、二人の水筒がぶつかり合う。

「さてよ、順番を守れって」

「俺が先に見つけたんだっ！」

別に相手に譲る方が早いのは分かっているのだが、人間としての本能がそれを譲らない。突然、カイの水筒が手から滑り落ちた。足元の水溜りに落ちる。それを拾おうとぶつくさ言いながら屈もうとした時、ヘルムを外していた頭に冷たいものが落ちてきた。

「ん？」

貪欲に水を貪るヨウを尻目に、カイは空を見上げた。黒雲が覆っている。やがて数秒と経たないうちに、大粒の雨が突然降り出した。辺りが一気に潤っていく。

「うわっ、雨！」

カイは降り注いでくる雨を避けるためにヘルムを被った。雨は瞬く間に急激になり、大粒の滴が防具を打ち続けた。

「よし、このまま歩いていこう。どこかで雨を凌がないと」

雨の轟音にかき消されないように出来るだけ大声で言った。それなのにヨウは聞こえない様子だ。それほど雨の量が多い。辺りを見失ってしまいそうだ。

幸いにも谷間は終わり、ある程度開けた場所に出ることが出来た。草木が先を争うように延び放題で、四方八方の岩場からは滝が尽きることなく水飛沫を上げている。しかし幸いにも天井だけが付いたような洞窟があり、徐々に落ち着いてきた雨も難なく凌げる。二人はその中で、焚き木を挟んで座っていた。

素手で魚を捕まえ、ヨウが食べられる物と食べられない物を見事に判別して焼いてくれた焼き魚を貪り食い、落ち着いた一時を送っていた。

「美味しいな」

「俺だつてちゃんとハンターの勉強をしてきたんだ。調合の仕方とかさ」

「雑草を食べてたくせに」

「それよりもさ、気候の違いが激しすぎないか？砂漠と比べたらオアシスどころじゃないよ。逆に砂漠の方が恋しくなりそうだな……。まるで『水没林』だ」

「水没林？」

ロッキラックに居たとき、あるハンターからそんな名前を聞いたことがある気がする。

「水没林って何だ」

カイは身を乗り出してヨウの話に聞き入った。

「ハンターがクエストで来る場所だよ。昼は常に雨が降って、夜は晴れている」

「じゃあ、もしかするとクエストを受けているハンターに会えるかもしれないってことか？」

胸中で希望が膨れる。

「分からないな。指定された場所とは違う確立が多いし、たぶんないと思う」

胸中の希望が一気にしぼんだ。

「このまま放浪か……」

「こんな所に人里があるとも思えないしな……」

しばらくすると二人はいつの間にか眠っていた。焚き木を囲んで『大』の字に寝そべり、ヨウは大鼯を掻いている。そんな二人の知らない間に雨は上がり、曇天は消えていた。空一面の星空が、この水没林の草木を優しく照らし続けた……。

「ここはどこだ……」

アヘンは呟きながら、ヘビィボウガンを杖代わりにして夜の砂漠をのろのろと進んだ。こんな物を杖代わりにしているのを見られたら顔から火が出そうだ。

それよりも、カイ達がどこへ進んだのか全く知らずにグレイの元を抜け出してしまったのは間違いだった。このまま出直したいのだが、自分がどこから来たのかも分からない。

「カイ……待つてろよ」

あいつに借りを返すんだ。そうでもしなきゃプライドが許さない。どんな綺麗ごとを考えても力はわいてこなかった。腹の傷が疼く。だが、視界の中に一つの影が見えた。建物のような。塵気楼で何であれ、とりあえずあそこへ行くしかない。それよりも自分の本能が、あの建物へ向かって進み始めている。

水没林（後書き）

新たな地、『水没林』に踏み込んだカイ達に待ち受ける苦境とは
！？

そろそろ新キャラも登場していきます。

厄介な関り

俺はどこまでも続く漆黒の闇を彷徨っていた。
なぜここにいるのか、なぜ進むのか、分からない。
とにかく進む。

進めば何かある気がした。

自分は何かも分かる気がした。

「やあ、ここまで来たんだね」

どこからか目の前に猫撫で声の男が現れた。赤い防具の隙間から、鋭い目の光が伝わってくる。

「さあ、おいで。こっちは楽だよ……」

男は手をゆっくりと差し伸べた。俺は甘い声につられ、その手を握った。死人のように冷たい手だ。なぜかこの手が愛おしい。離したくない。

だが、その手が突然焼けるように熱くなった。俺はとっさに手を離そうとしたが、男の手は岩のように動かず、俺を闇の中へ引きずり込もうとしていた。

焼ける…熱い…

「お前は誰だ!？」

「忘れたのかい?僕はあれだけ君を慈しんだだろう」

「知るかつ、その手を離せ!」

見ると、自分の手はその形を失っていた。黒くなり、爪が伸び、皮膚が鱗に変化していく。胸の奥底から恐怖が溢れ、体の中に溜まっていく。

——誰か助けてくれ……俺は誰なんだ。

どこへ行けばいいんだ……

いやだ、死にたくない。

誰か助けて。

駄目だ、誰か……。

「死ぬ…死ぬ…」

「だ、大丈夫！？意識をしっかりっ！」

「死ぬ……」

誰かの声が聞こえる。どうでもいい。何かに掴まらなと引きずり込まれる……。

アヘンは闇雲に手を振り回し、何かを思い切り掴んだ。

「きゃっ！」

甲高い声が聞こえた。次の瞬間、肩に重い衝撃が走った。

「ぐあっ！」

目が覚めた。あの男はいない。息が苦しい。体が痛い。俺の手は……。

アヘンは硬直する腕を必死に折り曲げて自分の目で確かめた。鱗など全く無い、元の手だ。自分が今現在、現実にいることを確認した。視線を上に向けると、人の顔があった。一瞬身がたじろいだ、自分より小柄で幼いことはすぐに分った。というか、こいつ、女か。床に伸びている自分を好奇の目で見下ろしていた。

「ここはどこだ」

「えっ？」

「お前は誰だ」

アヘンは床に横たわっていた自分の体を自力で立たせ、女を確認した。二重の、茶色い目をした少女だ。顔は悪くない。

自分が立った途端にそいつを見下ろすようになったせいか、かなりあどけない様子をしている。

「お前は誰だ」

アヘンは語調を強めて聞いた。向こうはかなり戸惑っている様子だ。

「えっ、その、あたしは……セーアです」

「セーア？誰だ」

「…さつきから何を言ってるんですか。いきなり人の体を掴んで」
状況が全く理解できない。まだ頭の中が朦朧としている。

「助けてくれたのか？」

「母さんが見つけたの。すぐそこで人が倒れてたって」

身に着けていた防具もボウガンも消え、自分はインナーだけになっている。腹に巻かれた包帯も真新しい物に変えられており、以前と比べると風通しが良い。逆に言えば素材が質素で、巻き方がおかしいせいもあるが。

「俺の装備は？」

「そこに置いてあるけど」

セーアが指差す先には、部屋の隅にきれいにまとめられた自分の荷物が置かれてあった。すぐに荷物が欠けていないかを確認したが、見る限りでは何も盗られていないようだ。

「それよりも、ハンターなの？」

回答するのが面倒だったが、ここまで恩を受けておいて無視する訳にもいかない。

「いや、そんなんじゃない。自分でも知らない」

「え？」間の抜けた返事だった。

「一応モンスターは狩ったことはあるさ。雑魚ばっかだけだな」

「じゃあ、お腹の傷も……」

「礼は言っておくが俺は急いでるんだ。不謹慎だとは思うが、食料や水をここで補充してすぐに出て行く」

「どこにですか？」

「……」

「行くあてなんか無いでしょう。コンパスや地図もなしにこの広い砂漠を歩くななんて無茶よ」

言葉が出なかった。確かにどこへ進めばいいかなんて自分には全く分からない。これだと砂原の村に戻るしかなさそうだ。さてよ、その村はどこだ？頭がこんがらがってくる。腹が情けない音を立て

た。

「アヘンさん、母さんもいるし、ゆっくりしていつて下さい」

こうして、仕方が無く一日の間この家に居座ることとなった。

砂漠の中に寂しく建つ一軒家。壁は殆ど板一枚。これでは暑くて仕方が無いかもしれないが、南の方角には崖がそびえ立っている為に南日は全くといっていいほど差し込まない。そのような居住的環境はどうにかなっているようだが、経済的に見てみるとかなり厳しいことは自分の目にも見えた。第一、外は殆ど不毛だ。一体何で生計を立てているのが不安だし、食料や水をどこから持って来ているのかも謎。そんな事を考えつつもアヘンはお構い無しに肉を貪り喰った。

「アヘンさん、育ち盛りなのは分かるけど、もう少し丁寧に食べて下さい……」

アヘンの目の前には、テーブルを隔てて瘦せこけた女性がいた。言わずと知れた、セーアだとか言う娘の母親だ。

「すまねえな……じゃなくて、す、すみません」

敬語が喋ることができない。今までそんなことを意識したことが無かった。

「こんな質素な家でびっくりしたでしょう。ましてはこんな所に……。今はお金ありませんが、生きていくのに必要な物はどうにか揃っています」

「それって…水は一体どこから？」

表情には出なかったが、勝手に口が動いた。

「南に崖があるでしょう。あれをしばらく越えると湿地帯なんですよ。水没林とよばれるところね。その水をどうにか引いているんです」

「水没林か……」

不意にカイの顔が浮かんだ。ついでにヨウとかいう奴の顔も。あの二人が現在生きているとすればそこしかないと思った。しかし本

当に生きていればの話だ。よく考えてみれば、ジエン・モーランなどという化け物を遠まわしながらも相手している。あいつらの力量ではどうなっているのか…。

「その水没林、行くのにどれほどかかる？」

「歩いて2時間ほどね。信じられないほどの気候の差よ」

「そうか」

椅子から立ち上がった。

「世話になった。俺はもう行こうと思う」

「何を言っているんですか。体はまだ回復しきっていませんよ」

セーアの母が驚いた目で自分を見据えた。多分、この体で普通に動いていることに驚いているのか。

「平気だ。あまりここに居ても迷惑がかかる」

「アヘンさん、駄目よ」

不意に目の前にセーアが道をふさいだ。先ほどとは全く違う鋭い眼で見据えてくる。

「それに…一つお願いがあるのよ。ねえ、お母さん」

セーアは背後にいる母親に目配せをした。母親のほうも何のことは分っている様子だが、なにやら言いづらそうに躊躇っている。

「でもセーア、やっぱり危険よ…」

「先に言ったのはお母さんでしょ？ 私達このままだと死ぬかもしれないんだよ！？」

「もしあなたに何かがあったらどうすのよ！」

結構な喧騒になってしまった。自分は言い争う二人の間に置き去りにされ、何の事だかさっぱりだった。面倒だが、仲裁しなければならぬ。

「…黙れ」

その一言で、あつけないほどに場は静まった。

「とりあえず何のことか説明しろ。それからどうするか決める」

「アヘンさん、ありがとう」

セーアが胸をなでおろしながら言った。

「とりあえず、聞いてください」

彼女の話はこうだった。

依然家の裏に家畜としてアプトノスを飼っていた。主に食用としてだ。野菜は魚は水没林で栽培・漁獲をしていた。そのような自給自足によって、生活は何の不自由も無く続いた。

しかし最近になり、砂漠全体の様子がおかしくなってきた。小さいながらも地震が何度も起こり、デルクスやジャギイといった肉食系モンスターがしばしば現れるようになった。目が覚めると、柵の中で放し飼いにしている家畜の数が減ることも珍しくなかった。

夜に監視を試みたが、確かに何かが群れとなってアプトノスに襲い掛かるのが解った。明かりも無い中では輪郭しかわからなかったが、体長は大人ほどもある鳥竜種。いわずと知れた、ジャギイだ。ハンターの中ではかなりマイナーな標的だが、素人に見れば充分に脅威はある。女二人にはどうすることも出来なかった。

そんな中に突然として現れたのがハンターの出で立ちをした自分だ。二人にすればこれ以上ない機会であることは明らかだ。

「なるほど。俺にその群れを退治してほしいんだな」

「恐縮ながらそうです」

セーアの母親がか細い声で言った。やはり相手は肉食系モンスター。アヘンに危険が及ぶことも承知しているのだろう。

しかしアヘンは表情一つ変えず、当たり前のようにこう言った。

「急いでる所だったが、それぐらいならやってやるよ」

二人の表情に一気に安心の色が現れたのが分かった。

林に潜む群れ（前書き）

夏休みの真つ最中は勉強を頑張らないといけない蘭土です。いつも読んでくださっている方にはありがとうございます……（感涙

さて、今回は長くて（いつもより）稚拙な文章です。果たして耐えられる人はいるのでしょうか。ではどうぞ。

林に潜む群れ

カイは雨の音に目を覚ました。かなりの豪雨だ。ヨウは既に起きていたらしく、緑色のインナーだけの姿になって昨夜のように魚を焼いていた。

「おはよー」

ヨウが魚の焼き具合を見ながらそっけない挨拶をする。

「またサシミウオでも焼いてるのか？」

「俺のをな」

カイは側に横たわっていた飛竜刀に手をかざしてみた。焼けるような熱は伝わらず、冷たい鋼の温度が感じられる。ジエン・モーションに立ち向かった時、自分には何が起きていたのだろうか。この飛竜刀には、別の使い道でもあるのだろうか……。

カイは立ち上がり、脱ぎ捨てていたボロスシリーズを装備し始めた。ヨウが目丸くしてこちらを見ている。

「えっ、何してるんだ？」

「出発の時間だ」

「は！？」

カイは太刀の納められた鞘を担ぎ、先に進み始めていた。洞窟の屋根から出て、防具の姿で雨を浴びる。

「何も食べないのか？」

「昼まで我慢だよ。なるべく早くここを抜けないと」

防具の上から大粒の雨に叩きつけられる。すぐその足元は一面が水浸しになっており、水の流れは闇雲に生い茂る草木の裂け目へと続いていた。もしかするとこの先は泳いで進まなければならないかもしれない。この重たい防具をつけてそんな事が無ければいいのだが。

ヨウは生焼けの魚を口にくわえながら、器用にロックラックスーツを着始めた。首に巻かれた赤い線が縁取られた布は、この湿気の

覆い場所では不利になるかもしれない。ところで彼の片手剣の腕はどのようなものだろうか。ヨウが拾い上げているアサシングリंगाを見つめる。

「俺の片手剣がどうかしたのか？」

「いや、一度も使ってるのを見たこと無いなと思って」

「モンスターが出てきたときに見せてやるよ。こういう場所はルドロスに遭遇しそつだな」

「『ルドロス』？なんだそれ？」

ヨウもだてに修行を積んできたわけでもないようだ。知識に関してはこの先を期待しておこう。

「ジャギイよりも結構大きいな。これぐらい」

ヨウは思い切り両手を広げてその大きさを表そうとした。幼児のようで結局頼りない……。

二人は草木の間を縫うように進んでいった。大きな葉に当たる度にその上で溜まっていた水が落ち、まさにここは水の楽園と言つていいだろう。逆にこのようにありすぎても困るのだが。

———
ヴォオツ

耳に聞きなれない音が入った。酷く掠れたような声だ。

「気を付ける。ルドロスだ」

ヨウが背後から肩を引つ張つてカイを木陰に隠れさせる。生い茂る木々の間を覗くと、確かにその正体が見えた。比較的濁つた浅い水辺で、黄緑色の生き物が3、4頭群がっていた。確かにジャギイよりも一回り大きく、バナナのような太くて長い体をしている。足は這う程度にしか短く、首には黄色い線が走っていた。見た目からして動きは鈍そつだ。

と思つた矢先に、一頭のルドロスがこちらを睨んだ。こちらに氣付いているのかは分からないが、視線が合ったような氣がした。背筋が凍る。

「ヴオオオウ！」

こちらを睨んだ一頭のルドロスが、首を持ち上げて掠れたような鳴き声を上げる。他の群れの仲間もそれに気が付いてこちらを一斉に振り返った。まずい、バレてる。

「ヴアアアオ！」

「ヴオオオ！」

互いに変わった奇声を発しながら、体を蛇のようにうねらせて接近してきた。しかも……速い！？

先ほどの距離では分かり辛かったが、ここまで瞬く間に接近されたら流石に焦る。普通に走っては追いつれてしまう。カイは鞘から飛竜刀を抜き出し、一番最初に接近してきたルドロスを斬りつけた。

ザシユン

「ヴオオオアッ！」

案外表皮が硬く、思うように斬ることが出来なかった。相手もそれほど痛くないといった様子で、短い四肢を水辺に立たせる。

「こんのっ！ここは実力行使だっ！」

突然背後から猛ダツシュしてきたヨウがルドロスの顔面に蹴りを入れた。ルドロスの体は大きく反り返り、その体を瞬時に押さえつけて馬乗りになる。戸惑うルドロスに間髪をいれずに拳を叩き始めた。無茶苦茶だ。これがハンターのやることなのか……？

だがその気迫に他のルドロスは慌てふためき、一目散に、先ほど以上の速さで水没林の奥へ逃げ込んで行った。ヨウの叩きつけているルドロスはすでに瀕死の状態。白目を剥いてうな垂れ、人形のようになされるがままになっている。

「お前……片手剣は？」

「別に、こんな奴は使う必要ないだろ」

ヨウは瀕死状態のルドロスをその場に放り捨てると、浅い流れを先に進んでいった。カイは飛竜刀を構えたまま先ほどの光景に目を

疑う。生身の体だけであんな簡単にモンスターの撃退が出来るのは彼だけではないだろうか。

カイは正気を取り戻し、太刀を鞘に収めてヨウの後を追いつめた。
「待てよー！」

雨の音で聞こえないのか、ヨウはそのまま先へ進んで行った。しかし、答えが返ってこなかったわけではない。

「オガアアアアアアッ！」

背後から掠れた鳴き声が聞こえた。だがルドロスにしては少し大きすぎる。カイはとっさに背後を振り返った。そこにいたのは……。
「うわわわわっ！」

カイのすぐそこにいたのは、巨大すぎるルドロスだった。自分の顔と同じ高さにその桁外れな大きさの顔があり、その付け根からは五本の手の平ほどの突起が飛び出していた。そして一番の特徴はなんといつても首だ。通常のルドロスとは全く違い、あまりに不釣り合いな大きさの黄色いスポンジが膨れ上がっていた。体の至る所から水分が滲み出ている。

とにかく、他の部分を観察している暇など無い。おそらく先ほど撃退したルドロス達があのリーダー格のルドロスを連れてきたのだろう。他のモンスターに例えたら、無論、ドスジャギイと同じだ。

「ヴァアアアアア！」

通常のルドロスにも劣らぬスピードで這いつてくる。前足からは長く発達した黒い爪が伸びていた。

一直線に逃げるなどという行動は最も危険だ。ディアブロスからの猛攻でそれを体で覚えていたカイは、とっさに横に避けた。体が水溜りの中に投げ出される。巨大なルドロスは、すでにこちらを向いていた。しかし迫ってくることは無く、それは巨大な体を前足で高く持ち上げ始めた。後足と尻尾だけで体を垂直に支え、さらに体を反らして口の中に泡を溜めているのを確認した。プレスだ。

「ヴォッ」

一声上げると長い首をこちらに向かせて、口内に溜まった泡を巨

大な塊にして飛ばしてきた。まだ仰向けの姿勢だったカイは避ける事ができず、そのプレスは全身に直撃。水とは思えない衝撃に防具が打ちつけられた。体が弾き飛ばされ、近くの木にぶつかる。防具がゴンと鈍い音を立てた。

「うつ……」

体が地面に落ちた。

「ヴォッ」

また同じ攻撃が飛んできた。体の痛みなどは忘れて瞬時に体を起き上がらせると、一瞬の差のダイビングジャンプで泡のプレスを回避する。また体が水の中に投げ出され、水しぶきを上げる。カイはとっさに顔を上げて酸素を吸った。一気に動きすぎたせいで体が次こそ動かない。全身を襲う痛みで体が硬直した。

巨大なルドロスが知らぬ間にすぐ側に近寄り、体を持ち上げていた。これほど近い距離ではプレスなど使えるわけが無い。この怪物がどんなおぞましい手を使おうとしているのか、カイは理解した。

「押し潰す気かっ!？」

怪物は体を反らせて、カイにのしかかろうとした。が、様子がおかしい。

「ヴォガアッ!」

怪物は体を反らしすぎたせいでそのまま後ろに倒れていったのだ。水を吸って重たそうなスポンジが重力をまともに受けて落下し、それを付けた巨体も水飛沫を上げた。どじなモンスターもいるものだとカイは思ったが、この巨大な体がひっくり返った先にある物にカイは目を疑った。ヨウがいる。しかも怪物の顔を掴んだ。まさか体を反り返らせた時に体へぶら下がり、バランスを奪ったのか。

「一体どこに行ってたんだ!」

「俺が逃げたと思ったか?」

ヨウはこんな状況にも関わらず、胸を張って得意げにしている。普通サイズのルドロス達は、突然ひっくり返って無残にもがき続けるリーダーに対して戸惑っている様子だった。

「カイ、こいつは『ロアルドロス』だ！覚えとけ！」

「こんな所で解説してる場合か！」

腹を見せていたロアルドロスは体を捻らせ、元の姿勢に戻った。首のスポンジを振って水分を撒き散らすと、次の怒りをヨウに向けたらしく、カイの存在など物ともしない様子になる。体を少し後退させると、そのまま短い四肢を蹴り上げてロアルドロスは大ジャンプを繰り出した。大ジャンプとはいっても高いわけではない。ほとんど地面と並行するように、軽く5メートルは飛んでいる。

「うわあっ！」

ヨウは横にも前にも避けず、その場で屈みこんだ。カイは一瞬心臓が止まりそうになった。が、ヨウは頭上擦れ擦れでロアルドロスの体をかわしきっていたのだ。実際、このような対応はハンターとして間違っている。ヨウも判断を下して屈みこんだのではなく、反射的にそうなっていたのだろう。運のいい奴だ。

「ヨウ、俺達には無理だ！下がるぞ！」

今はこれしか考えられない。自分もハンターとしての実力はまだまだだ。しかし今の行動を見る限り、ヨウにこのモンスターは早すぎる。

しかしヨウは下がる気配を見せなかった。それどころか、スタミナの消耗で息を整えているロアルドロスに走って近づいている。

「聞こえないのか？早く！」

「うるせえっ、俺の片手剣の腕を見とけ！」

ヨウはアサシಂಗリングを走りながら抜き出し、その抜き出しざまに斬りかかった。ロアルドロスの大きなスポンジがザックリと音を立てて切れる。しかしロアルドロス自身に傷が及んでいるわけには無い。ヨウは判断が間違っている。

「ヴオオオオオオ！」

ロアルドロスがヨウの無駄な攻撃を見かね、そのまま上半身を持ち上げた。押し掛かる気だ。

「危ない、逃げろ！」

ここから走っても助けられる見込みは無い。あの巨体に潰されれば、肋骨の一本や二本は折れる。

頼む、何とか避けてくれ……！

ヨウはアサシンガリングの刃で、完全に無防備になったロアルドロスの腹に斬りつけた。いや、斬りつけたと言うより、滑り込ませたといっても過言ではない。ヨウの剣捌きは滑らかで、その柔らかなくて白い腹には痛々しい傷跡が見受けられない。それなのに花弁のような真紅の血が噴き出しているのを見るのは、まるで錯覚を覚えているようだった。だが肝心なのはここではない。彼がロアルドロスの攻撃を避ける事ができるかが重要なのだ。

スパアアアアン……………

「ヴオオオオオッ！」

ロアルドロスは押し掛かるのを途中で止めて、力無く元の姿勢に戻った。

ヨウが避けもせずに続けざまに腹を斬りつけ、ロアルドロスを間一髪で怯ませたのだ。だが、もしもあの攻撃で怯ませていなければ、あの巨体の下敷きになっていたのは間違いない。彼は運がよかったのだ。いや、それとも計算の内だったのか？

ロアルドロスは下流に向かって逃げるようだ。しかし下流の側には自分がいる。ただでは逃げさせない。

カイは構えていた飛竜刀を、自分など気にも留めずに下流へ逃げようとするロアルドロスに切りつけた。

振り下ろし、横斬り、縦斬り、突き……。血飛沫が舞った。しかしロアルドロスは怯むことなくカイを通り越して下流へ走っていく。これで一件落着だ。カイは力なく水辺に座り込んだ。

「なんとか撃退できた。大きいモンスターに会うのはもう懲り懲りだ……」

「何言ってるんだ。早くしないとあの怪物が遠くに逃げるぞ」

「は!？」

目の前にいる余裕な姿のヨウの言葉に耳を疑った。自分達の目的はモンスターを殺すのではない。先へ進んでこの水没林を抜けるのだ。

「お前も今の戦いで懲りただろ。それに俺達の目的はこんなものじゃない」

「何が目的だ!プライドだよプライド」

「目を覚ませよ!俺達みたいな未熟な人間があんな怪物を倒せると思うのか!」

カイは思わず立ち上がって胸倉を掴んだ。それなのにヨウは毅然とした表情で言った。

「お前、本当は怖いんだろ。それに俺の何も知らないくせにどうしてそんなことが言えるんだ」

雨が一層激しくなった。水面で跳ね返った雨が足元からも飛んてくる。

カイは何も言えなかった。言いたくもなかった。確かに自分は、怖いのだ。巨大なモンスターを恐れている。ヨウの胸倉を離し、また座り込んだ。

「ごめんな、ヨウ。思わず取り乱した。でも、行かないほうがいい」

「ごめんだけど、俺は戦う。プライドとかそんな物は嘘だ。故郷に帰って、家族を少しでも助けたいだけさ」

ロククラックシティ。二人きりで命懸けで守れた街だ。守れたはずだ。

ヨウはいつの間にか辺りにいなくなっていた。

「……先を越されたか」

カイはまた立ち上がった。雨が弱くなっていく。

ここはどうか一肌脱ぐか。ヨウの援護ぐらいは自分でも出来る。

「ヨウ、聞こえるか!」

カイはヨウが行った筈の道をたどり始めた。

林に潜む群れ（後書き）

カイとヨウの喧嘩シーンをいきなり取り入れてみました。やっぱ
り仲良しの方が良かったでしょう？まあ、「終わり良ければ全て
よし」ですよね。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4573k/>

モンスターハンター～果てし無き旅～

2011年10月6日18時30分発行